大正元年九月二十日發行

婦人衛生雜誌

第二百七十四號

婦人衛生雜誌

第二百七十四號目次

講演

叢談

育兒

家庭衛生

雜報

廣告

私立大日本婦人衛生會

十月例會通知

來る十月五日(第一土曜日)午後一時より神田區一ッ橋通り共立女子職業學校内に於て本會例會相開き左の講話有之候に付き御知友御誘引御來會被下度候也

衛生雜話　醫學博士　今　裕君

大正元年九月

私立大日本婦人衛生會

（大正元年九月二十日發行）

講演

眼の價

附 眼の有する自然的衛生裝置

醫學博士 小川劍三郎

先日此會で何かお話するやうにと云ふ御頼でございまして、何う云ふ事を申上げたら宜いか分りませぬので、何う云ふ種類の御話をするのであつて、何う云ふ方がお聽きになるのであるか、それを伺ひましたところが、衛生會であるからして其專門の……私は眼科を專門にして居りますので、君の專門の事で話すやうにと云ふ御頼みで、お聽きになる方もいろ〳〵な年齢の方であると云ふことでございましたので、勝手が解りませぬ、何う云ふ風な事で宜いか、兎に角「眼の價」と云ふ題を出して、眼の價値は何の位するもので眼がどの位大切のものであると云ふことをお話しやうと思ひます。

「眼の値」と申しますと、眼の價が何の位する、此階下の陳列室にも此校の大層立派な製作品がありまして、あれに五拾圓であるとか、六拾圓であるとか、七拾五圓であるとかいふやうな札の附いて居るのを拜見致しましたが、吾々の有つて居る眼は何の位の札を附けて宜いか、五圓であるとか、拾圓であるとか、百圓であるとか、千圓であるか、或はもつと高く壹萬圓にするか、百萬圓にするか、もつと高いかも知れない、どの位の値打があるかと云ふのでございまして、皆さんの中で私の有つて居る眼は幾百圓であると云ふ方はあるまいと思ひます。或は千圓だ一萬圓だと云ふて御自分で有つてゐらつしやりながら其値打を御存知の方はあるまいと思ひ

ます、それではどの位の値打のするものであるかと言ひまするとこの頃の相場では……時に因つて眼の相場が異つて居りますので、それも此頃は東京などでは隨分いろ／＼な品物を賣つて居りますが、眼を賣つて居る店がありて、其處の番頭から聞いて來た譯ではないので、平生新聞を讀んで居りまして、新聞の中に出て居つた眼の價をお話するのでありますが、此頃……二三年來の相場に依りますと、一つの眼が約四千圓から五千圓位の値打がする、それでは五千圓やるからして、予の知つて居る者に眼のつぶれた者があるからしてこれを買つて來て吳れないかと言はれても御引受する譯には參りませぬ、私が賣つて居ると云ふ譯ではないので、今さう云ふ風な相場があると云ふことを御話するのであります、何にさう云ふ事が書いてあるかと言ひまするど、昨年の二月十六日、大阪每日新聞、其時分には外の新聞にもありましたが、私の見ましたのは大阪每日新聞であります、奈良縣に、二階堂村と云ふ村があつて、

其村に辰藏と云ふ兒があつた、名前はどうでも宜うございますが、六歲の子供があつて、近所の子供同志で石投げの遊びをして居つた、ところが段々遊びが嵩じてツイ喧嘩になつたのでございませう、さうすると近所の橫田村と云ふ村に勝と云ふ子供があつて、それが十三歲である、其子供の投げた石が折惡しく辰藏の眼に當つた、其爲に傷が出來たので近所の眼科醫師に連れて行つて、いろ／＼治療をして貰つたが、それが原因になつて到頭眼が潰れて仕舞つた、投げた方も、投げられた方も子供であるから、是は別に責任の義務のと云ふ事はない、併し子供は之に附いて居る親が責任を有つて居る、子供には、まだ一人前にならないから法律上責任の義務のと云ふことは無いけれども、それを監督する親がある以上は其親がそれを辨償しなければならぬと云ふので、其辰藏と云ふ子供の親が訴へた、其損害賠償金が四千圓と云ふのです、六ッの子供でどうして四千圓と云ふ勘定をしたかと云ふと、先づ六ッから段々大きく

なる、人が子供を生んだ以上は其子供を育てるのは親の責であるが、其子供が一人前になれば、其子供は獨立して行くべきものである、それだからして二十歳までは子供に眼があらうがあるまいが親の方で育てる、それで二十歳から假りに六十歳まで活きるものとする、昔は人生五十年と申しましたが、今は世の中がいろ〳〵複雑になつて來たから五十歳位では割が惡い、學校にしましても昔のやうに少しばかり寺子屋に行つて直ぐ一人前になれると云ふ譯には行きませぬ、男の子であると三十歳前後までの學校教育を受けなければならぬので、大變永くなる、順つて先の方へ延ばす、皆なが皆な百二十五歳とか百五十歳までも活きることが出來れば尚宜しうございませうけれども、六十と假りに定めて、六十なら二十を引くと四十年になります、其四十年の間、一日平均七拾五錢稼ぐ、皆さんがお聴きになつたら一日に七拾五錢ばかり稼ぐと云ふのはケチなものだと思はれるでございませうけれども、是は田舍のことで

すから一日七拾五錢の計算、辰藏の親も勞働者か何かでございませう、所が一日に七拾五錢取るのだけれども、其中三分の一だけが片方の眼が潰れた爲め收入が減るから、それを勘定して一日七拾五錢の三分の一を四十年間集めるとそれが參千六百圓になるそれに四百圓の醫者の謝禮を加へて四千圓と云ふ計算を出した、所がそれが奈良縣の地方裁判所で負けて、大阪の控訴院に控訴した、其結果何うなつたか知りませぬが、兎に角其申出が四千圓であるから其眼には四千圓の價があつたと言つて宜い其次は明治四十四年四月十一日で、大阪府の南河内郡に古市村と云ふ村があつて、其處に新太郎と云ふ子供があつた、九歳になる、其子供が表で遊んで居ると云ふと、近所の金持の子供に政次郎と云ふ子供があつて、それが玩具の弓を持つて來て木綿針を棒の先に附けたので射た、ところがそれも折惡しく新太郎と云ふ子供の眼に矢が立つた、玩具の弓であるけれども其尖に針が附いて居つた爲に、狙つて射た矢が偶々新太

郎の眼に中つた、そこで大阪病院に連れて行つて治療して貰つたけれども、遂に失明して仕舞つた、其時の損害賠償金が、計算の方法は別に申しませぬが、四千七百圓約五千圓であつた、さうすると四千圓と云ふのもあるし、五千圓と云ふのもあるし、いろいろである、それは其身分に依りませう、若し皆樣であつたならばもう少し高く御計算なさるかも存じませぬけれども、先づ斯ふ云ふ相場が出て居るのでございます、丁度書畫のやうなもので、價打が有るのか無いのか分らぬ、皆樣にしたならば、もつと高いでせうが、兎に角新聞に出て居る値の附いたのは四千圓から五千圓位、ちよつと聞きますと一つの眼で四千圓から五千圓としたらば大變價の良いものゝやうに思はれる、けれども考へて見ますると大變廉い値段であります、もつと高くても宜い。

それでは他に、昔の話にもつと高い相場の出て居つたことがあるかと申しますると、是は皆樣も御存知でありませう、小學校の本などにも書いてありますから御存知でせうが、杉山檢校と云ふ人があつた、是は德川時代、綱吉將軍の時分の人であつて、按摩鍼治の稽古をしやうと思つたが、大變に性質の惡い子供で、いくら敎はつても覺えられない、覺えられないから非常に憤慨して何うかえらい人になりたい、それには京都に行つて稽古しやうと思つて、江戸を立つて京都に行く途中、江之島の辨財天へ行つて三七二十一日の間參籠をして、自分の技術の上るやうに願掛した、ところが滿願の日に當つて、うつうつとして居る中に其處に寢入つた夢に偉人が出て來て、或物を與へた、眼が覺めて見ると掌の中に鍼治に使ふ針が入つて居つた、其針が入つて居つたと云ふことは無論本當のことではない、さう云ふ風な比喩でございませうが、兎に角それからして京都へ行つて、其時分の有名な人に就て敎はつて段々えらくなつて、杉山檢校と云ふて其時分の檢校の取締になつたが、屢々將軍の御病氣の時に治療をして大變に手柄があつた、爲に、將軍綱吉公が非常に御褒に

なつて、或時言はれるのに、お前に何でもやらう欲しい物があれば何んでも遣る申立つたが宜からう、お前の望む物を遣るからして言つたら宜からうと云ふ話であつた、其時に此杉山檢校と云ふ人が……前に申しませぬでしたが杉山檢校は兩方とも眼が見えぬ全くの盲人であります、それで、將軍の勢で何でも望めと言はれたものですから杉山檢校が、恐入りますがそれでは片眼でも宜しうございますから、眼を戴きたいと願つた、ところが今のやうに四千圓、五千圓と云ふ眼があれば直ぐ買つて與れてやつたのでございませうが、今と同じに其時分にも賣物は無かつたものと見えて將軍も大變に困られた。

陛下の御言葉は綸言汗の如しと申しまして、一度言ひ出したらもう返すことは出來ない、將軍の言ふたことでも同じて、上に立つ方の仰つしやつた言葉は、一遍言ふたら今のは間違つた止すと云ふ譯にはいかない、取消することは出來ないから將軍もお弱りになつた、併し將軍は頓智の良い方であつたから、フト考へ付いて本所に一ッ目と云ふ所がありますから其處へ屋敷を下さつた「一ッ目」を下さると云ふので一ッ目に屋敷を下すつて家を建つて下すつた。

杉山檢校は其處に屋敷を貰つてから江の島の辨財天を勸請して窟などを拵へた、今日でも其窟は殘つて居ります、之を以て見ますと本所一ッ目の屋敷は可なり廣い、一町四方ばかりの屋敷でありますから、それを今日の相場で勘定して見ると四五千圓より餘ほど高い値打になる、計算したら何萬圓と云ふ値打になるかも存じませぬ、併し、其位の値打がありますけれども、それを賣らうと言つたら、或は賣れるかも存じませぬ、私共醫者の方で言ひますと、一の病氣の原因を調べたいと云ふ時に、其病氣の起り初めの眼球なら眼球を取つて調べると分りますが、病氣が進んで仕舞つてから調べたのでは分らぬと云ふ時には、五六千圓位出して買つて調べても宜いと思ふ位の値打のあることもありますから、賣らうと思つたら買手があるか知れませぬが買はうと思つても

賣手は中々無い。
さう云ふ風に眼は大切な、又誰でも大切にするが、隨分世の中には心得違ひの人がありまして、眼を大切にしない、價が丸でないのではないかと思はれることもあります、東京の麻布の第三聯隊に一人の兵隊があつて、徴兵に行つて居つたが厭で堪らない、どうかして免れやうと思つて、悪い病氣の毒を眼の中に入れて、さうして眼を潰して盲目になつたと云ふ人間があつた、さう云ふ風に粗末にする人もあります、日本の兵隊ばかりでなくして、私が千九百五年に伯林に居りましたが、其時分に佛蘭西にあつた話で、佛蘭西の兵隊が矢張り徴兵で居るのが厭で何うにかして國に歸りたいと云ふので、いろ／＼思案をした結果、其友達の兵隊に賴んで針を持つて來て其針を燒いて、それを眼に突刺して貰つた、餘り快い氣持ではなからうと思ひます、其位兵隊が厭であつたと見える、賴む奴も賴む奴ですが、賴まれた兵隊も呑氣な奴で、鰌でも刺すやうに燒いた針を兩方の眼球へ刺した爲に、其眼は失明して兵役を免れると云ふ目的は遂げたけれども兵營を出されると同時に其者は八年の刑に處せられたさうでございます、又賴まれて針を刺した奴も同じ樣な刑罰に處せられた、さう云ふ風に亂暴に眼を扱ふ人も隨分ある、さうかと思ふと大變に大切にする人がある、價がどの位であるか想像も出來ぬ位であると思はれることがある。世中で何が一番大切でありますかと云ふといろ／＼ありませう、或は金が大事であるとか或は位地が大事であるとかいろ／＼の事を申しませうけれども、併し總ての階級の人、貧富を論せず境遇の如何を論せず、總てに通じて何が一番大切であるかと言ふと、命が一番大切と云ふことには皆樣御異存がなからふと思ひます、命が一番大事である、所が眼の悪い人が私共の處に參りまして、大變眼が悪いから是非診て呉れ、さうして何年掛つても宜いからしてどうか癒して戴たい、若し眼が潰れたらいつそ死んで仕舞つた方が宜い、命の無い方がましだ、眼

が無くて活きて居るならば寧ろ死んで仕舞つた方が宜いと言ふて頼まれる患者が随分あります、斯う云ふ事を始終聞いて居りますが、それでは眼が愈々潰れて仕舞つて、どうです先生、どうもいけないさうですがそれではいつそ死んで仕舞ひますと言つて首を縊つたり何かして死ぬ人はまだ私共は見たことがない、尤も醫者の方で言ひますと、時に依ると言ひ方に依つて餘りひどい事を直接申しまして、一遍に驚かせると其人の精神状態が變つて随分自殺などをしないとも限らぬやうなことがありますから、命にしても直接にお前の命はむつかしいとは言はない、又眼の方にしても、先生どうです、お前の眼は潰れて仕舞ふとは云はないものであります、然し眼が潰れた爲に死んだと云ふことは餘り聞かないのであります、所が昔の人に眼が潰れたので直ぐ死んだ人がある、（軸を示す）此畫を描いた人であります、猿猴捕月と云ふ題の圖で、猿が池に映つた月を捕らうとして居る、是は人間のいろ／＼な事に比喩を採ることの出來る圖でございますが、之を描いたのは田中訥言と云ふ畫家でありまして、私は眼の大切だと云ふ話をするので、其方の意味を以つてこの幅をお目に掛けるのでありますが、畫家としても却々有名の畫家であります、この人元來剛直清廉にて氣慨に富むだ人で自分の云つたことは必ず行ふ、虚言は少しも云はないといふ質の人である、それで此田中訥言と云ふ人は、人間は眼が見えないやうになつたら死んで仕舞つた方が宜いと平生云つて居つたさうです、ところが、此人は晩年に眼の病氣に罹つて段々惡くなつてとう／＼失明て仕舞つた、すると訥言の友達が、訥言の盲人となつたことを聞いてこれは餘程險吞な事であると云つて心配しておつたところで訥言は平生眼が潰れた位なら死んで仕舞つた方が宜いと云つて居つたが、愈々眼が潰れたから平生思つて居つた通り死んだ方が宜いと云ふので、斷食をした、一週間ばかり食はすに居つたけれども、どうしても死なれない、是は成田の不動さんなどに行くと

四十日間位、斷食をして居る人がある、私はした事はありませぬが、何でも初めの二三日はいかぬさうですが段々よくなる、よくなると云つても一年も二年もではありませぬが、一週間位では死なない、訥言は一週間經つても死なないので、面倒になつたものですから舌を噛んで死んで仕舞つた、この訥言の考へでは眼の價は命の次處ではない命と同じ價であつたのです、卽ち眼は幾千圓幾萬圓のといふ相場のつけられない程の價のあるものです。

それでは眼と云ふものは命と替へる人があつた位ならば、どの位大事なるものであるかと云ひますと、それはわざ〳〵私が皆樣に對して眼が大切だなどゝは云はないでも宜いやうなものでございますが大變に大事なものであるといふ其例として一つ二つのお話を致して見ましやう。眼は何んな業をする人であつても大事である、或は戰爭をすると云つても眼が見えなくては出來ませぬ、山岡中佐と云ふ方は旅順の攻擊の時に使者に立つた有名な人ですがいくらえらくても强くても眼が見えなくなつて仕舞ふと武人としての働をする譯には行かない、武人としていへは今日では廢人となつておる、文學の方でもさうであつて、眼が見えなくなると非常に不自由を感ずる恰度此學校から直ぐ近くの飯田町の二丁目の中坂下に住んで居つたことのある馬琴と云ふ文學者がある、今から百二十年位前、寛政年間の人でありますが、曲亭馬琴と云ふ人で有名な八犬傳であるとか、夢想兵衛であるとか、朝夷奈巡島記であるとか、いろ〳〵有名な小說を作つた此人が中坂下の伊勢屋と云ふ下駄屋で地主をして居る人の婿になつて、其處で著述を始めて、暫しの間飯田町に居つた、今でも馬琴が硯水に使つたと云ふ井戸などが保存されて居る筈であります、馬琴は非常な澤山な何百卷と云ふ著述をした、極く筆の達者な人で、一日に何十枚何百枚と著述したのでありますが、其人が年を取りましてから眼が見えなくなつて非常に不自由をした、それは私が拙く話をしますよりは、馬琴の書いた物

を見ると能く分りますからしてそれを讀んだ方が却て宜しうございます。

八犬傳の第九輯の第百七十九回を草して居る時分に眼が見えなくなつたと云ふので、八犬傳の終の方に附錄になつて居る回外剩筆と云ふ文章がありますから其一部分を讀みませう。

朧月夜に立つに似て、一字も寫くことならず、せんすべなくて書案を退け筆を投捨て歎息のあまりに、

なからふるかひこそなけれ見すなりし
書卷川に猶わたる世は

と眼が見えずなつて、筆を投捨て歎息した、併しそれでも終ひまで作らふと云ふ志は止まなくして、己れの嫁女に代筆させやうとした。

今と違つて、今では女でも敎育を受けますから文字も知つて居りますけれども、今より百二十年も前の方は、特別の方はありますけれども、通常の人は文字を知りませぬから、この時の馬琴の苦心のさま想ひやられます。

代筆させて、一字每に字を敎へ、一句每に假名遣を誨るに婦人は普通の俗字だも知るは稀れにて、漢字雅言を知らず、假名遣てにをはだにも辨へず、偏旁すらこゝろ得ざるに、只言語をのみもて、敎へて寫する吾苦心は、いふべうもあらず、況して敎を承けて寫く者は、夢路を辿る心地して、困じて果はうち泣くめり、然而代寫一枚に滿れば讀反させて、又敎へて傍訓を寫するに、熟字を知らず、又句讀をこゝろ得ねば讀時或は字を脫し、或はなき字を添へ讀むめり、讀むすら輙からざるに、知らず、こゝろ得ざる事を口授せられて、寫く者の艱難を思へば、いと痛しさに、幾度か已ばやと思ひしを、又思ひかへして、

筆捨の松のふる葉も言の葉も
子等に敎へてかゝするぞ憂き

と打詠じて、且慰めつゝ、一二卷代寫させぬる程に、他もやうやうに熟て苦心初の如くにはあらず

偏傍なども稍々わきまへ知りて言を費すも舌の疲るゝまでに至らず」

と書いてあります、さう云ふ譯で非常に骨を折られて居る、馬琴の日記を見ますと、今日「馬琴日記鈔」と云ふ本が出來て居りますが、眼病になつた時分の日記が少し纏めて書いてあります、それを見ますると段々に眼が見えなくなつて來たので。仕事をすることが出來ない、一日には數十枚も書けた人が中々書けなくて困るものですから、良い眼鏡を懸ければ能く見えると云ふことを聞いて、大變高い金を出して眼鏡を買うた。

林駐癡約束の厚眼鏡持參代金壹兩壹分の由也、しばらくかけ見可レ申旨申聞け卽預りおく、然れども思ふに似ずして宜しからず、衰眼實にせんかたなし

如何にも讀んで居つて氣の毒で堪らないやうな事が書いてある、非常な文學者であつて書くことの達者の方であつても眼が見えなくなると困る、先程も山岡中佐のことを申しましたが、何人のよく知つて居ります、義太夫の中の、三十三間堂の棟木の由來、平太郎住家の段でありますが、平太郎と云ふのは、却々強いのださうですけれども彼は鳥目に罹つて居つた、鳥目は晝は見えるが夜は見えない、夕方から見えなくなつて來る、それで平太郎住家の段は夜だものですから平生知つて居つた武術も役に立たなくて非常に困つたと云ふやうなことで、眼が無ければ大變困る、其の他宗敎家であるとかいろ〳〵の技術家などで眼が惡くなつて困つたと云ふ例は澤山ありますが同じことでありますから其位にして置きます。

（以下次號）

叢談

何故肺結核は婦人に多いか

附　豫防及び治療法

澤田順次郎

(一) 其の死亡數

肺結核は傳染病であつて、特發するものではありませんが然し其の傳染性が極めて緩慢なると、癩病者の近親族を逐ふて發生する傾きあるとに依つて、從來遺傳するものゝ様に思はれて居ました。けれども其の傳染病なることは明白な事實で今日では何人も疑はぬ所であります、試みに同患者の喀痰を猿、豚、鼠、雞等に吸はしむると、肺結核に罹つて死で了うから、尚能く傳染病なることが判明ります。そして其の徴候は猿では咳嗽が出、熱がさし、食慾が減じ、漸次瘠せ、四肢に浮腫を生じ、衰弱して遂に斃るゝこと殆ど人の如くであります。

肺結核の現今猖獗を逞しうしつゝあることは、何人も知る所でありますが、此の疾患が社會の如何なる階級に最も多いかと申すに、生活程度から言へば、上流よりも下流に多く、富者よりも貧者に多くあります。又普通人と小學教員とを比較すれば、後者は著しく多くして、前者の約二倍餘であります。斯く肺結核は社會の階級及び生活程度に依つて異なるが男と女とを比べて見ますと、女の方が常に多くあります。これは統計表を見れば直ぐに判明りますが、先づ最近十年間に現はれた肺結核死亡數は、最低六萬二千、最高七萬七千で、平均は七萬三千です。之を言ひ換へれば、我が國では肺結核の爲に、年々七萬三千人づゝを失ふ譯です。年に依つて増減がありますが、大體に於て年々増加することは、等閑視すべからざる問題です。

年次	男	女	合計
明治三十四年	三〇、九八〇	三一、〇二二	六二、〇〇二
明治三十五年	三二、二二九	三三、七六四	六五、九九三
明治三十六年	三二、九五五	三四、七六七	六七、七二二
明治三十七年	三四、〇八六	三五、〇二一	六九、一〇七
明治三十八年	三六、九八九	三九、〇七二	七六、〇六一
明治三十九年	三六、一六三	三九、三〇六	七五、四六九
明治四十年	三六、三七五	三九、一六九	七五、五四四
明治四十一年	三七、〇三六	三九、五五三	七六、五八九
平均	三五、六四五	三七、七八五	七三、四八〇

即ち八年間の平均は、七萬三千四百八十人で、内男は三萬五千八百四十五人、女は三萬七千七百八十五人で、男より多いこと二千百四十人です、更に之を人口一萬に對する死亡者の割合から見れば、次の如くです。

年次	男	女	計
明治三十二年	一二・八	一二・五	二五・三
明治三十三年	一三・三	一三・二	二六・五
明治三十四年	一三・五	一三・八	二七・三
明治三十五年	一三・九	一四・八	二八・七
明治三十六年	一四・〇	一五・一	二九・一
明治三十七年	一四・三	一五・〇	二九・三
明治三十八年	一五・三	一六・五	三一・八
明治三十九年	一四・八	一六・四	三一・二
明治四十年	一四・六	一六・二	三〇・八
平均	一四・一	一四・六	二八・七

即ち人口一萬に就き二十八人七分の割合ですが、此の數は確實に肺結核と診斷された者のみですから、若し間接に肺結核に基因するもの、或は其の後發症等に依つて死亡せる者等を加へたならば、更に多いこと疑ひありません。

肺結核は頗る頑固な病氣で、全治するにしても、死亡するにしても、共に長年月を要します。曾て諾威にて肺結核患者二千五百人、内男九百五人、女一千百人に就き、其の病に罹つてから、死亡するまでの時間を調査したことがありますが、平均三年一ケ月半で、女子の方は、男子よりも約一ケ月長がつたといふことです。これは男女の體質が違つて、女子は男子よりも粘り氣が多いからです。然らば何故女子は男子よりも餘計に肺結核に罹るか。其の理由は次に述べませう。

（二）女子の肺臟

普通の疾病にあつては、女子の之に罹るもの一般に少なく、男子は常に大多數を示して居りますが、肺結核と消化器及び心臟にかゝる疾患に限り、女子に多いのは、如何なる理由であるか、精細に之を知るには内臟の構造、容積及び其の身體との割合又は疾病に對する抵抗力等を調査しなくてはなりません。心臟と胃とは別として、茲に先づ肺臟に關する事實を說きませう。

男女の肺臟を比較して見るに、女子の肺臟は小兒の時は大きいけれども、男子の肺臟は發情期の頃から大となり、成年に至つて、其の差は四と三との割合となります、此の結果は胸圍の上に現はれて、女子の胸圍は男子よりも狹くあります。胸圍は身長又は體重等に依つて、一樣でありませんが、本邦の成年男子の胸圍は八四・六五センチメートル、女子は八〇・九一センチメートルで、男の胸圍を百とすれば女の胸圍は九五・五です。

女子の肺臟は男子より小なること右の如くですから、肺活量も小さいこと當然です。肺活量とは、十分に空氣を吸つて、之を排出する所の氣量で、之を計るには肺量計を用ひます。之に由つて測つた本邦人の肺活量は次の如くです。（但し單位センチメートル）

男	三、〇〇〇乃至三、二〇〇
女	二、二〇〇乃至二、五〇〇
差	七〇〇乃至　八〇〇

之を百分比例に換算すると、男の百に對し女は七三・三乃至七八・一で、約四分の一乃至三分の一小さいのです。之れは成年期に於ける差異ですが、發情期に於て、女子の身長及び體重が男子よりも優れる時に於ても、尚女子の肺活量は男子に及びません。これで女子の肺臟は絕對に男子より小さいことが判明ります。

次は呼吸の仕方ですが、男の呼吸は胸部よりも、上腹部に著しく、女子の呼吸は之に反します。卽ち

女子は呼吸するに主として肋骨の筋を用ひ、男子は多く橫隔膜を使ひます。それで女子の呼吸を胸式呼吸と云ひ、男子の呼吸を腹式呼吸と申します。

女子の胸式呼吸を營むことに就き、數說ありますが、ジブソン氏の說の如く、女子が帶を以て季肋部を緊縛するに依るといふことは穩當の樣に考へられます、何故といふに、女子は常に幅廣い帶を以て季肋部を緊むるから、橫隔膜は十分に働くことが出來ぬからです。此の事實は田村の女子の如く、餘り多く如上の帶を用ひぬものは、男子と同じく腹式呼吸を營むことに對照して判知することが出來ます。

胸式呼吸と腹式呼吸と、其の肺に及ぼす影響に就ては、未だ能く知られて居りませんが、胸式呼吸を爲す者の肺は、腹式呼吸を爲す者に比して弱いといふ說もあります。これは假說としても、女子の肺の小さく、隨つて容積の狹いことは、前條の事實に依つて疑ひありません。さういふ種々の事情から、女子の肺は、結核菌に對する抵抗力が弱くして、疾患に罹り易いのであります。

（三）　女子の職業と肺結核

女子の肺結核は近年に至つて劇增した傾きあることは、前の統計で明かですが、明治三十二三年の頃肺結核は、女子よりも男の方が少し多くありました。それが三十四年から反對になつて、女子の方は男子より少しづゝ多くなり、三十八年からは女子の數が著しく增加しました。それは男の死亡數が減じた爲でなく、男子も漸々に增加しつゝありますが、女子の方が一層多くなつたからです。

女子は元來肺に罹り易い性質ならば、以前から男子よりも多く罹らなくてはならんのですが、それが近年に至つて、急に劇增したのは、其の間に、何か原因がなくてはなるまいと思ひます。これは近年女子が社會に出て職業に從事するもの多くなつた結果です。これまで家內に引き込んで、家のこと許りをして居た女子が、生存競爭の風に吹き立てられて、社會に出る樣になつた。それが爲に交際も繁くなつ

て、不知不識の間に病菌に侵さるゝ樣になつたのです。

女子の職業と肺結核との關係は、男の例に依つても判明ります。それは男子でも職業の種類に依つて死亡に差があるからです。例へば石工の如く、塵埃多い空氣中に於て勞働する者は、他の新鮮なる空氣中にて職を執る者よりも、遙かに多い類です。英國の統計に依れば、男の肺結核で死する者は、人口の千に對し、二・六〇即ち約千分の三ですが、刀物工は千分の七・三に上り、更に砥石工は千分の一六・三に達して居ります。これは肺結核患者の喀痰から出た病菌が、塵埃に附著して場内に漫布する爲です。細菌學上の試驗に據れば、一片の塵埃は數千の病菌を附著して空中に浮游すといふことです。小學教員に肺結核の多いのも、白墨の粉末が飛散して肺に入るからです。

箇樣に家外の職業は、肺結核を傳搬する媒介となりますから、多く家内に閉ぢ籠つて居た女子が、社會に出る樣になつてから、急に患者の殖へたのは、怪しむに足らんことです。

（四）　肺結核の豫防及び自療法

肺結核は不治の病ではありませんが、然しこれに罹ると、治療に多くの費用を要し、且つ長引きますから、全治しても、第二の苦痛即ち貧苦に惱まさるゝこと常です。故に肺結核は注意の上にも注意して、これに襲はれざる樣心懸けなくてはなりません。

病根即ち結核菌を媒介するものは主に空氣ですが又飲食物、器具、被服物等から傳染することもあります。それで牛乳は勿論、他の獸鳥魚肉も十分に消毒したものでなければ、口に入れてはなりません。消毒とは高熱を以て病菌を撲滅することで、牛乳は一定度まで沸騰し、肉類は煮或は炙れば、萬一病菌が居ても死滅するから安心です。人乳も消毒することが必要ですが、これは牛乳の樣に煮沸することが出來ませんから、結核の疑ひある人の乳汁は小兒の授乳を中止して、別に乳母を雇ひ入るゝか、或は人

工養育法を行はなくてはなりません。然し病氣は何時起らぬとも限りませんから、萬一家族中に肺患者の生じた際に處する覺悟を決めて置かなくてはなりません。此の場合には決して狼狽することなく、醫師の診斷に依つて、其の意見に從ふは勿論、患者に對しては出來得るだけ慰藉を與へ、一方には豫防を嚴にして、其の傳染を防止することを肝要です。今、此等の豫防法に就き、其の要綱を示せば、次の如くです。

一、患者の室を定めて看病人の外、他の人の出入を禁じ、看病人も成るべくは他の人に接せぬ樣にすること。

二、患者の使用する器物及び手巾類を別にすること。

三、特に咯痰の如きは痰壺に收めて、消毒した上一定の場所に燒棄すること。

四、室内の蠅を驅除すること。

五、患者若し產婦なる時は授乳を止むること。

肺結核の療法には種々ありますが、大別すると藥劑療法と自然療法との二種となすことが出來ます。前者は種々の藥劑を用ゐて療するのですが、後者は一切藥を用ゐずに、專ら外界の境遇と同化し、空氣、氣候、食物等を應用するのです、初期は勿論第二期の者も、自然療法で癒つた例が多くあります。

自然療法の中にも、空氣療法、溫泉療法、食養療法精神療法等の別があります。此の中には貧富に依つて、行はれるのと行はれないのとありますが、最後の精神療法は最も簡易で、何人にも行はれますから、例として之を說明しませう。

精神療法は文字の如く精神的に療治する法です。之を行ふには、一切の心配と不平とを去つて、一意信念を強くするにあります。肺結核は病勢と反對に精神が過敏となつて、物事を氣にする病氣ですから、努めて精神を安靜にし、たとひ心に悲哀又は不滿不平等がありましても、無頓著にならなくてはなりません。それから不治の病といふ誤解を去り、攝養宜

しきを得れば全治すること疑ひなきを信じて、命を天に任せるのが得策です。（完）

室内の光

古來何れの國にも太陽に關する神話が御座います、卽ち日の神に就て樣々の面白い話がありまして、日光の作用を物に譬へ人になぞらへて其の德を讚美して居ることで御座いますが、實際今日の學問上から考へましても、太陽は地球上に生存するもの丶生命の源、元氣の泉と申しても宜しいので御座います。一寸考へましても若し太陽が無かつたならば、草木一本生じない、從つてこれを食物とする所の動物は生活が出來ない、熱と光との源が無くなつた日には、此の世界は全く闇となつて冷え果て丶しまはなければなりません、古人が太陽を拜みましたのは誠に尤な次第であると思ひます。

今、日光の直接衞生上の關係に就て考へて見まするに、先づ天氣の好い日には、蛙や魚類は存じませんが、一般に動物が活潑である、人間も確かに愉快を感ずる、之に反して曇天雨天には、何となく氣が塞いで面白くない、これは他の原因も加はつて居りますけれども、主として日光の加減に由るのであります、これを以て見ても如何に日光が衞生上必要であるかゞ解るであらうと思ひます。殆ど日の目を見ぬ彼の北極地方に長く滯在致しますと、皮膚は蒼白になり、消化器も惡くなり、最初は精神が沈鬱しますが、後に至りますと過敏になつて來ると云ふ風に身體竝に精神に異常を起して來ると云ふことであります。是亦主として日光の不足に由て起る所の障碍で御座います。

西洋には『日のさ丶ぬ所には醫者が入り』と申す諺が御座りますが、これは經驗上證據立てられた所の衞生上の法則であります。これが說明は左程困難なことではない、前に述べた所だけでも略ぼ斯く云ふことが出來ますが、尙ほ日光には强力の殺菌作用

があると云ふことは極めて大切な一條であります。即ち種々の怖るべき黴菌類を迅速確實に殺してしまふ働があるのであります。日光の入らぬ室には絲狀菌、即ち普通カビと稱する類のものが繁殖して空氣を不潔に致し、又日光が入らぬ位の室であれば、從つて風通も惡く、暗いから不潔も目に立たず、萬事が非衛生的の狀態になつて參ります、それでありますから、日のさゝぬ所には其代りに醫者が訪問するやうになる譯であります。

右の經驗に基づいて之を實地衛生上に應用致しますのには、家の內にも十分日光が射入り、室の隅々までも其の治療的效能と、病の種を撲滅する所の作用とを發揮せしむるやうに勤めなければなりません。所が吾々の住居と云ふものは、其の大部分に十分日光を行渡らすと云ふ譯には迚も行かぬのが事實であります。然るに斯樣に光線が不足なのにも堪へ、一向平氣で居れると云ふものは、要するにこれは人間の眼の性狀に由るのであります。

凡て明るい暗いと云ふのは、比較上の事でありますが、吾々の眼は、光線の多い處では其の瞳孔が縮で少さくなり、光線の少ない處では擴がつて大きくなり、餘程の範圍內に於て種々の明るさに適應することの出來る仕掛になつて居るものであります。これが實際上の一例を擧げて見ますならば、日中外の明るい所を視て居て、急に室の內に這入りますと、瞳孔が適當の大さに恢復致しますまでは眼の前に手を持て行つても視えない程に暗く感じます、これは大抵の人が經驗して居ることゝ思ひます。又吾々は空に一點の雲もない夏の日盛にも書物を讀むことが出來ますが、空の晴れた滿月の夜にも遠方の山々や森影を認むることが出來るのみならず、文字を讀むことも出來る、而して其の光の差は何の位かと申しますと、空の霽れた日中の明るさは滿月の夜の大約六十萬倍程明るい、此程廣い範圍の明さの中で同じく文字を讀むことが出來るのであります。尙ほ明るい暗いは比較上の感じであると云ふことは、日蝕の

時の暗いと云ふのと、月夜の明るいと云ふのを較べて考へれば解かる、最近の日蝕の際に、獨逸國伯林府では、太陽の九十六プロセント程缺けました、それで太陽面の隠れない部分は僅に四プロセント卽ち二十五分の一程しかなかつたのであります、從つてそれだけ明るさも減じたので、非常に暗かつたと云ふことであります、卽ち普通の明るさの二十五分の一程であつた譯であります、然るに滿月の夜の明るさでも、僅かに日中の明るさの六〇〇〇〇〇分で一でありますから、右の大暗黑の際に於ても實際は尙ほ滿月の明るさよりは二萬四千倍も明るかつた譯であります、之を以て見ましても吾々の明るい暗いと云ふのは、主觀的のもので、又比較的のものであつて、確かな成績は、精密な檢査法に依らなければ解からぬものであると云ふことが分かります。

明るさを測りますのには、何時でも變りの無い光の單位と器械とを用ひまして、自然の明りでも人工の明りでも總て此の單位と比較して其度を定めるのであります。卽ち光度計、フォトメートルと云ふものであります。

光度計には種々のものもありますが、大凡これを比較致しますのには、四センチメール位の焔で、煤煙を立てずに靜に能く燃える所のステアリン蠟燭の明るさが、單位に相當致します。これを光源の單位と定めますと、次には此の光源の一單位で何れだけ照らすことが出來るかと云ふことを檢査致します。それには暗室の內で一メートル程の距離の所に定規の蠟燭を立て、それに白い塗板を立添へますと、其板の上の照度が卽ち光度の單位でありまして所謂一燭光のことであります。

昔大きな室の內に全家族が只一本の蠟燭をつけて間に合せて居つた時代の事を考へて見ますと、蠟燭から三尺程隔て居る人は、僅かに一燭光の明で以て縫物もし書物も讀んで居た譯で、これよりも近く一尺五寸程の處まで進んで、やうやく四燭光、二本蠟燭をつけ得る程の金持であれば、必要の場合には八燭

光位まで明るくすることが出來たのであります。

今日の吾々は光明に渇して居りますので、人工採光の状況も昔とは全く違つて參りました。例へば卓上一メートルの處に眞直に懸つて居る三頭の百燭瓦斯ランプの下に坐を占めて居ると致しますと、都合三百燭光度でありまして、一メートルの距離の處に於て三百燭光度が照らして居る譯であります。その倍隔つた處では、四分の一卽七十五燭光の明るさが卓上を支配して居ります。蠟燭時代に吾々の祖先が滿足して居つた明るさの十倍程の明るさで御座います。實に非常の差でありますが、それでも天氣の好い日に、能く出來て居る室内の明るさには及ばないのであります。

吾々が夏の日中に郊外に出まして、太陽は最早見えないが、青空だけは見えると云ふやうな、鬱蒼と繁つた大木の陰に休みました時に、其の木の影を、太陽に照らされて居る地面に較べて見ますと非常に暗いやうに感じますが、これを正確な器械に依て測つて見ますと、三百五十乃至五百燭光の照度で御座いまして、これを夜間の人工的の照光に致しましたならば、恐らく眼が眩む程の明さであらうと思ひます。

更に此の如き方法にて、全く太陽に照されて居る地面、例へば日の當つて居るアスフアルトの道路などの照度を測りましたならば、實に數千燭光以上に昇るであらうと思ひます、故に太陽は、如何なる人工的の光よりも遙かに多量の光を供するもので、此の有用にして衞生的の貴重なる光を吾々の住居の内に導き入れることは、一に賢明なる建築法に依るのであります。

我邦の普通の建築は、窓が澤山あると云はんよりは殆ど空開の體裁で、夏は障子さへ除いてしまへば丸で戸外も同じ位でありますから、西洋建築に比して非常に空氣の流通が良い、然し障子は光線を遮り、よし障子を開放つても簷下が長く、座敷の内迄は大概光線はさゝず、田舍又は別莊などにては座敷の中より一部分天を仰ぐことが出來ませうが東京邊の町

屋では、それも叶ひません、西洋造の家屋は幾つも硝子窓を附けますから室内に光線を入れるには大分都合が宜いのでありますけれでも、これも大厦高樓が立並ぶやうになつては、如何とも致し方がありません、少なくとも幾らか靑空を窺き得れば我慢しなければならぬ、甚しいのは日中でも絶えず瓦斯燈を用ひなければ仕事が出來ないと云ふやうな住居も澤山御座います。然し斯樣に不都合が生じて參りますと、又一方にはそれ〴〵の工風が出來まして、窓の側まで寄らなければ天が見えぬと云やうな室には、其の窓の前に三稜硝子を裝置して光線を室内に射入せしむると云ふことであります。之に依りますると、明るさも倍若しくば三倍程までになると云ふことであります。然しこれも止むを得ざるに出たることでありまして、眞に健全なる住居としましては、どうしても明りが障碍なしに入るやうでなければなりません、衛生上の規則と致しましては、窓の大さは總計座敷の廣さの五分の一以上で、なるべく高く、又室内よりなるべく廣く天を望むことの出來るやうにと云ふのが注文であります。

東京邊の從來の町家は此點から見て決して衛生的の家屋と申すことが出來ません、これは改良を要することでありまして、又これから新しく建築するに就ては十分衛生上のことを顧慮して、なるべく光線の十分に採れる工夫が肝要であります、實に日光の如く貴い、效力のある、而かも殆ど無盡藏、無代の光は御座いません、吾々は日光の作用に就て、昔よりも遙にその貴いものがあることを發見して來て居るのでありますから、今日よりも一層これを利用する工夫をしなければなりません。

醱酵と腐敗と

醫學士 藥學士　高橋學而

第一章　有機物質——分解

秋風立ちて新酒熟す。今にして醱酵を説くの篇、必

ずや一路登仙の率意なかるべからず。

千萬の事物一として他と全く等しい者はない。卽個々の事物には、又夫れ〳〵の差別がある。生者は滅び會者は離る。全宇宙の姿は一刹那も同じ樣では止まらぬ。永劫の流轉であつて又永劫の代謝である。之を眺めて生々の勢と思ふ人は世を樂しむの徒である。目して壞滅の相と觀ずる人は、火坑の苦に悶ゆる輩である。物理學者は此處にエネルギーの變化、勢力の消長を說き、化學者はもつはら物質の變化に著目する。

精神界の事は暫く措く。自然界の森羅萬象が、ある唯物論者の說の如くに、悉くエネルギー若くは物質の、差別と變化とで說き盡せるかどうかは疑問である。殊に生命に關係した事、卽所謂生活現象が現今の樣な物理學と化學とを以て、隈もなく明かにならうとは容易に信ぜられぬ。

併し又あらゆる事物あらゆる現象を通じて、生物界となく、無生物界となく、エネルギーと物質とが、甚主要な位置を占める事は最確かである。又あらゆる事物のあらゆる變化に當りて、物質の變化と勢力の消長とが、甚主要な原因をなす事も確である。無生物界の紛芸は、餘程根本的の處まで、物質と勢力とで硏め盡される事も確かであらう。

約言すればエネルギーの差異（例へば溫と冷と、明と暗と、運動の遲と速と、光と熱と等）、及びエネルギーの變化（例へば溫暖の者が次第に冷へ、燈光を點ずれば暗が明となり、又電氣を變じて運動となす等）と相竝んで、物質の差別及び變化が、現象界の二大經緯を成す。こゝに物質と云ふのは、重量を有する一切の物の意味である。

音響、光、熱、電氣、物體の運動などを總て、エネルギー或は勢力と申す。尚エネルギーの何たるやは第二六九號「石炭と石油」につきて參照せられたく、光、熱につきては第二五五號「熱と溫度」第二六三號「光と色」等を參照せられたし。エネルギーは重量なき者の一つなり。

天地間の一切の目方ある者を、次第に簡單な者に分けて行くと、窮竟八十餘種の物質に歸著する。之を名けて元素と云ふ。互に差別ある一切の萬物は、唯八十餘種の互に差別ある元素が、種々の割合に、若干宛、互に集まつて出來た者に外ならぬ。そして物質の變化と云ふのは、畢竟、或は互に結合せる元素が、一部、若くは盡く離れ、又は多くの元素が互に結合して、別の物質を作る事に外ならぬ。前の作用を分解と名け、後の作用を化合と云ひ、雙方を通じて化學變化と呼ぶ。化學變化はやがて物質の變化である。

八十餘種の元素から成る萬物の中、炭素と云ふ元素を含まぬ物質を無機物と名け、炭素と他の元素とから成るものを總て有機物と名ける。鑛物地質界は一般に無機物の集合であつて、生物體の成分は主として有機物である。

物質の方面から見た腐敗及び醱酵は、有機物質の分解作用に屬する。

第二章　醱酵の定義及分類

あけくれの人の耳にも、腐敗醱酵の語は敢てめづらしくない。米の醱酵によりて麴を作り、麴を醱酵させて酒を釀し、更に酒を醱酵させて酢を作る。食物が夏時に酸敗し、溜り水が腐つて孑孑が湧くのは人も知る。齒牙の間に挾まつた飲食物の腐敗醱酵は、大多數の齲齒の原因となり、大腸內で同樣な作用が行はれては、滋養分以外の滓から糞便が出來る。尿が醱酵すれば其中の尿素はアンモニアとなり、糞の醱酵に當りては、惡臭ある硫化水素が出來る。肥料に供する排泄物は、成たけよく腐つた者がいゝ。併し飲食物が腐敗しては大きに困る。麴が酒に化するのは何にもなるが、

にほ鳥の葛しか早稻の新しぼり
　酌みつゝ居れば月傾きぬ　　眞淵

父が醉家の新酒の嬉しさに、酒がやたらに醱酵して酢になつては人泣かせであるとに角醱酵及び腐敗は人生に對して甚大きな關係

を持つ。聊か腐敗醱酵について語らしめよ。

甚古くから、酒精醱酵、醋酸醱酵を人類が知り、又隨所の文野の國民が、之を實際に應用し、又學術的にも甚しば〲研究せられたにも拘らず、醱酵作用の何たるやは、未だ詳しくは判つて居らぬ。從つて醱酵と云ふ言葉の定義も、稍明透を缺くの嫌がある。

現今では有機物質の化學變化の中、(一)普通の室内の溫で初まつて、(二)徐々に行はれ、(三)多くは其時に瓦斯體を發生し、(四)同時に又多くは熱を生じ(エチルギーの變化!)、(五)且多くは微生物(釀母菌、バクテリヤ、分裂菌等)が、其作用と密接な關係を持つ、分解作用の一群を醱酵と呼ぶ。腐敗は醱酵作用の特別の一例である。

主な醱酵作用を列擧して見ると、

一、酒精醱酵。砂糖類がアルコホル(酒)に變ずる作用。

二、醋酸醱酵。アルコホル(酒)が醋酸、(酢)に變ずる作用。

三、乳酸醱酵。

四、酪酸醱酵。　夫れ〲砂糖類より乳酸若くは酪酸を生ずる作用。

五、腐敗。窒素若くは硫黄(二つ乍ら元素なり)を含む有機物質が、分解して惡臭ある瓦斯を發生する作用。

六、澱粉の糖化。糖化素(チアスターゼ)の爲めに催ほさるゝ者。

等であつて、此外腸胃内で行はれる、澱粉脂肪、蛋白質等の消化も、大部分は醱酵作用の内に屬する。

第三章　發行の行はるゝ要件。

以前には、腐敗若くは醱酵は、必ず生きた微生物の働きを待つて、初めて行はれ得ると考へた。併し此考は誤であつた。微生物は其生活を營む際に、たゞ一種の酵素と云ふ物質を作り、之が醱酵作用を行はしめる者であつて、之さへあれば、微生物は居なくても、作用の遂行に毫も差支のない事がわかつ

た。此酵素は蛋白質に類似した物質で、其化學的構造については、未だ一向判明せぬのみならず、其大多數は未だ之を純粹に採り出す事さへも出來ぬ。況んや之を化學者の手で、人工的に合成せしむる事をやである。從つて大多數の醱酵は、やはり微生物の補けを借りなければならぬ。若し微生物を殺して仕まへば、酵素の生成は立所に止息して、醱酵作用も亦漸々休止する道理である。

酵素自らは、醱酵作用の爲めに、何等の變化をも被らぬらしい。どういふ風の化學的、若くは物理的作用を行つて、酵素が物質の醱酵を促がすかは、殆ど全く未明の事柄にぞくする。

要するに醱酵の行はる條件としては、

第一、醱酵する物質の存在が必要である。(之は又細菌の食物となる)

第二、には酵素(若くは黴生物)が同時に存在せねばならぬ。

第三、溫度が餘り高くても、或は餘り低くても酵素は其作用を營まぬ。氷結點以下に冷せば醱酵は全く休止し、之が平溫に復すれば、作用は再び初まる。百度以上迄も熱すると、酵素は分解して仕舞つて、再び冷しても作用が起らない。最適當な溫度は十五度乃至三十度位の處である。

第四、は氷がなければならぬ。

第五、空氣(若くは其酸素)の供給が十分でなければならぬ。

第六、は酵素の作用を妨害する者があつてはならぬ。たとへば濃厚のアルコホル、昇汞、水楊酸、石炭酸などは醱酵の妨げとなる。

第七、は若し直接微生物に依て醱酵を營ましめる時は、醱酵する物質の外に、生物の副食物となるべき者が必要である。

以上の要件から腐敗並びに醱酵を制止する手段も容易に見當が付かう。

まづ第一には醱酵すべき物質を、たえず強く冷して置いても良い(冷藏庫)。次には此を一旦百度以上に

熱して、術後全く空氣との流通を絶つても良い、(罐詰)。空氣を遮斷するのは、物質が再び不潔に復した時に、空氣中の黴菌がその中へ這入つて來ぬ爲である。第三には單に空氣の接觸を妨げるのみで足りる事もある(水漬)。第四には物質を乾燥させてもいゝ(乾物)。又は或は鹽漬けにし、或は砂糖漬にする法もある。此二法は第三法と同じく、唯水分の供給を惡くするのを目的とする。第六には之を燻すのも宜しい(燻魚、ラカン)、最後に硝石、硼酸、水楊酸の樣な所謂防腐劑を施す事もある。

之等の方法は、主に飲食物に就いて述べたのだが、木材の防腐、衣服、物品の防腐などにも、やはり此中の適當な者を撰んで施行し得るのである。著物の土用干は、乾燥法の應用である。

或は直接に微生物を殺しても、亦醱酵制止の目的は達せられる。勿論上述の種々の方法も、單に酵素の作用を杜絶する許りでなく、多少は同時に殺菌の效力もあるが、然し多くの場合に、殺菌には防腐よりも強烈な手段を要する。從つて飲食物、又は衣服などでは、殺菌法を用ゐるのに、いくらかの顧慮が必要となる。特に最後の藥品に依る法、即防腐劑の代りに殺菌劑を用ゐる事は、飲食物では大抵絶對に之を止めなければならぬ。無智の商人が升汞などを飲食物の防腐に用ゐて、恐るべき中毒の原因を作つた例は澤山にある。

序に申して置くが、酵素の働を止める藥品必ずしも微生物を殺さず、又殺菌の效ある藥物が、必ずしも酵素の作用を止めない。併し概して殺菌劑は、たゞの防腐劑よりも猛烈な劇毒藥である。

第四章　飲酒の可否

千鍾飲んで足らず、萬段說いて盡きざるは天の美祿である。

三千の華麗に向つて七寸の彩管を採る。說く所は仙漿醸熟の章。筆端に靈あつて稍出鱈目にならうとも、諸姉乞ふ之を恕せよ。

今は可笑しい時代である。飲酒は社會的、道德的に

よくないから、政府の事業で之を禁止しやうと云ふ。其爲に酒に苛税を課してやらうと云ふ。否現に一升につき二十錢宛の税が掛けられて居る。之れは人道の爲め、社會政策の爲めに、人民の飲酒を節してやらうと云ふ、爲政者の慈悲心に外ならぬそうだ。併し人民が申し合せて飲酒を止めたらどうか。一年八十萬圓の税源は忽ちに枯渇して、二ケ師團の増設は愚か、現在ある鎭臺も軍艦も、大いに減却しなければならぬ。云はゞ人民が不道德の飲酒を敢てするが爲に、國家の財政が立行く勘定になる。妙な話ぢやないか。之は我日本許りでなく、世界の文明各國の通勢である。

許りではない。細民は星を仰いで出で、月を蹈んで歸る。日がな一日槌鍬と心中をして、うちへ歸れば妻子は、襤褸著物に、南京米と引割との半々を食つて居る。若い妻の髮には白い毛が交つて、あどけない兒の額に皺が見える。休養する夜は短かく、遊ぶべき日曜と云ふ者もない。勞働者迚も人間である。

たまには遊びたからう。愉快な目にもあひたからう。工場の窓から往來を見ると、著物の縫ひ方も知らん様な女――貴婦人が御召縮緬で、米の相場も御存知ない大紳士と、自働車に相乘つて行く。僅少な時間と些末の賃銀とで、彼等が購ひ得べき快樂は、一杯の酒を措いて他に何があらう。併も飲酒は人道に背くと云ふ。日本外史に喉を扼して背をうつと云ふ句があつた。現時の勞働者は、咽をしめられて、尻をぶんなぐられる。その汗と血は紳士の月給になつて、やがて淑女の著物に化ける。

戲和二谷禽語一　　黄山谷

南村北村雨一犁　新婦餉レ姑翁哺レ兒
田中啼鳥自四時　催レ人脫レ袴著二新衣一
著レ新替レ舊亦不レ惡　去年租重無二袴著一

飲んだ一杯の酒が小生の腹の中で醱酵して、奇妙な屁理窟を化成した。以下には謹んで糖類の酒精醱酵を記さう。

第五章　酒精醱酵

澤山の砂糖類の內で、直接に醱酵してアルコホルに變じ得る者と、一應一種の分解を經て、其後初めて醱酵を爲し得る者とある。例をあげて申せば葡萄糖果糖は前の部類で、蔗糖、麥芽糖、乳糖は後の部類に這入る。後の者は、何れも一種の分解作用、即所謂加水分解に依つて前者となる。例へば蔗糖が分解すると、葡萄糖と果糖とになり(之を轉化といふ)麥芽糖の一分子が分解すれば、二分子の葡萄糖になる。かくて後初めて酒精醱酵を營み得るのである。

　砂糖の詳細については、二　五八號「砂糖」の條を見られたし。

蔗糖、乳糖、麥芽糖の類ひが、分解して葡萄糖屬に變ずる事も、又一種の酵素を用ゐて、一種の醱酵作用に依りて之を行はしめ得る。米から酒を作るのは三種類の酵素に因る、三段の醱酵作用が順次に行はれるのである。

まづ第一には米の澱粉が、チアスターゼといふ酵素の爲めに醱酵して、麥芽糖となり、次に麥芽糖がマルターゼといふ酵素に作用せられて、葡萄糖となり(以上は米が麴に化する所)、最後に葡萄糖が釀素の働きに依つて、酒精醱酵を起してアルコホルに成る。麴の花は糖化素とマルターゼとを生ずる菌絲であつて、釀母菌は釀素を生せしむる微生物である。何れも其種子は澤山に不斷に空氣中に浮遊して居る。釀母菌の外に、酒精醱酵を起させ得る微生物は、まだ若干種あるけれ共、やつぱり釀母が一番よく目的に協ふ。

釀母は卵圓形の直徑〇・〇〇八、乃至〇・〇一ミリメートルの單細胞植物であつて、適當な食物(砂糖、含窒素物質、並びに無機鹽類等)と、水分と空氣とが存在し、適當な條件(溫度其他)が備はる時は、急速に發芽法に因つて蕃殖する。其際に砂糖は酒精となる。

同じ釀母菌の種屬にも、又多少ちがふ類があつて、例へば麥酒を作る者と、葡萄酒を釀す者とは、自ら

僅かの相違を示す。此等の爲めに出來る醱酵の副産物も、又其種類と量とが少しく違つて來る。

砂糖の酒精醱酵に當つて、主な産物としては、アルコホルの外に炭酸瓦斯を生じ、少量の副産物としては、グリセリン、アミルアルコホル、琥珀酸、乳酸、醋酸などを生じ、又別に微量の種々の芳香性の物質が出來る。全砂糖の約五乃至六%が、斯樣な副産物の原料となる次第である。種々の酒類に特有の、一種の香氣と味とを賦する者は、此芳香性の物質であつて、混成酒では迚も之を望み得られたい。

アミルアルコホルを澤山に含む酒は、殊に強く二日醉の惱苦を惹起す。所謂フーセル油の主成分は卽このアミルアルコホルである。

（未完）

耳の攝生（承前）

外傷、耳の外傷。卽ち耳を打つてから中耳炎を起す事があります。これは平手で耳をうつとか、或は耳の近傍で大きな聲を出したり、大砲の音を聞いたりする時に鼓膜が破れて、其所から黴菌が中耳にはいる爲めであります。併し鼓膜が破れても其の治療をさへ誤らなければ中耳炎を起す樣な事はありませんがへたにつゝきますと、直ぐ中耳炎を起します。若し專門の醫者がありませんでしたなら、全然醫療を受けないで、綿の栓をしておき、鼻を拭く事、咳嗽をする事等に注意して耳に風の拔けない樣にして居りますれば、五七日の中に全治するものであります

次に耳の中にはいつた物が鼓膜を破つて中耳炎を起す事があります。子供は遊んで居る時に、小豆、石、米などを耳の中へおし込む事が少くありません、はいる時は容易くはいりますが、中へはいりますとなか〳〵出まん、「みゝかき」や何かで取らうとすると益々なかへはいり、遂に鼓膜を破つて中耳の中にはいります、之れが爲めに耳の痛いのはいふ迄もなく、頭痛、眩暈、嘔吐などが起ります、そして長く止つて居ります時は外聽道に瘀が出來て非常に痛

んだり、中耳炎を起したり致します、時として耳の中にはいつた豆が生命を失ふ原因となる事もあります、或はまたこれが爲めに癲癇を起した事もあります。

耳には又中耳炎に似て痛みと熱とを以て始まり、後膿汁が耳から流れ出る病氣があります、これは鼓膜より外の部分卽ち外聽道の病氣でありまして、多くは耳を搔いたのが原因となるものであります、卽ち耳が痒ひ時には誰でも耳搔きで耳をかきますが、之れが抑々間違を生ずる始めで、外聽道を傷つけ、そこに腫物が出來て非常に痛むのであります、痛みは例へやうもない程烈しいもので、之れが爲めに三日四日も一睡だにする事が出來ずに非常に衰弱する事があります、其れ故堅いもの例へば釵、マッチ、木、竹等にて耳をかく事はさけた方が宜しいのであります、若し搔くならばあまり深く入れないで、折れる心配のないやうな、また耳を傷つける心配のないやうな釵のやうなもので、そつと搔くべきでありま す、そして耳に垢がたまつたならば、決して耳搔きで取らずに、醫者の忠告に從つて適當の方法で洗ふのが宜しいのであります。

以上申しました外に耳の病氣は澤山ありますが、此れをさけるには種々の關係を知らねばなりません。

一、感冒は中耳炎の原因となるばかりでなく、他の種々の耳の病氣の原因となります、例へば凍傷のやうなもので、東京ではあまり見ませんが、北國では凍傷の爲め耳が全く腐され落ちる事があります、其外にも感冒の爲めに耳が遠くなつたり、耳鳴りが起つたり致しますから、感冒に罹らない事、其の治療を怠らぬ事は非常に大切な事であります。

二、傳染病の中で、急性傳染病は中耳炎の原因となる事が多いのでありますが、其外に黴毒の樣な傳染病は外に耳の病氣を起します、卽ち耳鳴りを起したり、耳が突然遠くなつたり致します、また黴毒に罹つた親の子に此が出來る事があります。

三、生活法との關係も亦見過してはなりません、水

車屋の番人、鐵道の運轉手等の様に、たえず烈しい音を聞いて居る者は屢〻耳が遠くなる事があります、其外鑄掛屋、鍛冶屋、石屋、なども耳が遠くなる事が多いものであります、軍人では砲兵が聾になる事があります、此等はあまり強い音響の爲め内耳が病氣になり、聽力がわるくなつたのであります、それ故斯かる劇しい音を聞かなくてならない職業の人は、耳の孔に綿などをつめて音響をはげしく感せぬ様にする事が必用であります、殊に大砲の音、汽車の響などの時に注意すべきであります。

四、中毒との關係、一番に耳を害する毒は鉛、砒石、水銀、硝酸銀、煙草、酒、沃度加里、モルヒ子、クロヽホルム、キニー子、サリチール酸等であります、此中沃度加里、モルヒ子等は醫者でなければ用ゐられない藥でありますから若し其の中毒を起しましたならば、それは醫者の罪であります。

鉛の中毒は一般に婦人が注意せなければならないものであります、鉛の中毒は鉛を食ふ爲めに起るのではありません、鉛は白粉の中に混じて居るものでありますが、其の鉛を澤山含んで居る白粉を用ふる時に、慢性の鉛の中毒に罹るのであります、此の慢性の鉛中毒は身體の種々の部分に病氣を起すものでありますが、其れと同時に耳をも害し、耳が遠くなり、耳鳴りが起りまして、遂には聾になつてしまふやうな極めてたちの惡るい耳の病氣を起すものであります。

硝酸銀も劇藥でありますから、通常の人は用ゐる事がありませんが、之れは西洋の白髮染の中にはいつて居るものであります、硝酸銀のはいつて居る白髮染を度々用ゐますれば、硝酸銀の中毒に罹ります、此の中毒に罹る時は、音を聞く毎に耳に痛みを感じまして、高い聲の談話をする事が出來なくなります、そして始終耳鳴があり、眩暈も起ります。

砒石は皆さんの御存じの恐しい毒でありますから自殺でもする時でなければ用ゐません、時として貧血の人に血を補ふ爲めに服用さする事があります、西

洋には之れを服すれば皮膚を奇麗にし、柔かにし、光澤を能くする事が出來るものであるといふ迷信がありまして、婦人の間に盛に用ゐられて居ります、其の爲め種々の病氣を起し、耳にも病氣を發します。酒の衛生上有害な事は云ふ迄もありませんが、之れは耳にも大層有害であります、酒に醉ふた時に耳ががん〳〵鳴り出すのはアルコホルの急性の中毒であります、併し之れは醒める時にはなくなりますが、慢性の酒精中毒になりますると、なか〳〵なほりません、耳が絶えず鳴りまして、遂には氣の狂ふ事があります。

煙草は直接にも間接にも耳を惡くするものであります、卽ち煙草の中に含まれて居りますニコチンと申します毒の爲めに、直接に耳が害せられて、耳が遠くなる事があります、之れは左程多いものではありません、之れに反して、煙草の煙が咽頭、喉頭カタルなどを起し、其のカタールが歐氏管の粘膜を傳はつて中耳に達し、中耳カタールなどと申します病氣を起します事は可なり多いものであります、煙草を喫む人の咽腔の惡るい事は誰も知らるゝ所でありませう。

（以下次號）

育兒

活用されたる育兒法

藤村晴子女史が、共立女子職業學校に於ける有爲の一職員として、同僚竝に生徒間に敬重せられつゝあることは人の知る所なるが、女史は又私立大日本婦人衛生會の事務員として、不斷の熱心を以て會務に盡瘁せらるゝは、役員及會員諸姉の常に感謝する所なり、且つ女史は今や未亡人たりと雖、二人の令息、及一人の令孃の何れも體格强壯にして、學業亦優秀なるは、皆人の羨む所、而して其の育兒上の用意を聞くに

至て、その是あるを知るなり、頃者女史に逢ふの序、談偶〻育兒に及ぶ、女史曰く、予が育兒法は一に小兒科の國手宮本仲先生の指導に由れるのみ、而して三十餘年前北海の地に去るに際し、國手に請ふて得たる育兒上の心得書今に存す、於れ卽ち予が實行したる育兒法なりと、予既に此言を聞きて、名醫と賢母との間に於ける一美事となし、其の書を本誌育兒欄に投せむことを乞ふ、女史亦世の爲に之を快諾す。而かも事二十有餘年前に屬するを以て、日進月歩の小兒科學に於て幾多學說の變遷あり、今は或は國手の意に滿たざるもの無からむかを恐れ、一度宮本氏の校閱を經むことを希望せり、然るに氏も亦濟生の業繁忙を極むる間に於て、親しく校閱の上、二三削補を加へ且つ懇篤なる返書を添へられたり、予は國手の親切此の如きと、女史の愼密此の如きものあるを見て、益々その成果の美ある所以を解せり、依て「活用されたる育兒法」と題し、國手の返書をも併せ掲げて、讀者諸姉の參考に資することゝなせり。（編者識）

前略陳者小子先年貴下の御訊問に拜答致し置候保育者の心得一斑を此度婦人衛生會雜誌に御掲載相成度由に付諾否如何こ御照會に預り誠に御念入り候次第就て回顧仕候に最早貳拾有餘年前の事にて候得ば何を認め候得し哉其頃の紅顏少年今は白頭翁こ變し候程故記憶にも留り居不申玆に更改めて御廻附の意見書爲念展讀候處實に血氣に任かせて筆を走らせ無遠慮に無經驗の愚見を發表致したるものにて却て御羞かしき次第こも可申候斯樣の稿本を能くも御保存被下候御義只管感銘難有奉存候乍去夫れこ同時に甚以慚愧の至こも相考へ申候貴處には昔日の記念にも可相成に付其儘御掲載相成度云々是も却て面白き一の御笑草こ承知可仕奉存候併し其頃こは著しく兒科の進歩を認め候今日なれば自然要點を補足致し候方可然こ相考へ候故兩三ヶ所に多少加筆候上御返却申候事こ仕候雜誌原稿こしての御採否は貴所樣に御一任申上候間可然御取計被下度候誠に三文價も無之劣文なれば二十餘年前の古創也その恥曝らしも今更一興何事も懺悔するこそ罪滅

しの端緒なれど御辭退もせで却て光榮千萬乎と心得違ひも省みず玆に敬みて御請可申上候御諒恕御願申上候先は忙中草々御答迄如斯御座候頓首

八月望前三日　仲　邦

藤村御北堂樣御許

（玆に左の育兒者の心得概略に添へられたる當時の書狀ありしも今之を略す）

(一)育兒者の心得概略

一

保育にも亦た大人の衛生の如く、第一に衣食住の三點尤も肝要にて候得ば、主として此三つの點に注意せずんばあらず、且又眠覺、動靜、遊戯、等常住一切の事も必要にて、之を種々六ケ敷申し、殊に完全に之を實行せんことは中々困難にて、醫者自らすらも尙ほ論語讀みの論語識らずといふに、陷らん程にて御座候、然れば先づ必要點のみを摘みて、記憶し易く行ひ易き樣約言可申上存候、貴姉には定めて物足らぬ樣に被思召候べく推し候得共、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し、との戒に從ふて簡約如左に御座候、御察し被下、御質疑の點重て御申越奉願度候、偖て其約載すべき所を數條に區別し、先づ衣裳より相始可申候。

嬰孩は總て慈母の注意に據りて、生活を得る者なるは勿論にて、饑寒も、欲望も、痛苦も、皆な啼泣と不自在なる音聲とに因りて我が希望を訴へ、我が滿足を求むるに過ぎず。然れば母の配慮は寸時も缺く可らざるものにて、其音聲や容貌などを聞見する毎に、其愛兒の心を汲み取るといふ迄に注意せねばならぬ次第にて候、卽ち先づ、

（イ）●頭に就ては古來の慣習の如く、產毛を剃り除くに及ばず候、長く延び過る時は刈込みてよろし、元と產毛なるものは天然の頭巾も同樣にて候、故に室內に在つては人工の頭巾など用ふの要無之、但し初生兒には、一頓に冷風等に逢ふを厭ひ候故、四季其時々從ふて適當なる處置を要すれ共是等は產婆に御任かせにて宜しからん。嚴寒の頃、毛髮薄き且つ未

だ幼弱なる嬰兒なりとすれば、室内にても時宜に應じて薄き一重の頭巾など用ひらるゝも妨げ無し。併し厚き毛織毛編み等の頭巾は、冬季外出の際ならでは用ゐられぬが宜し。餘りに温包するは脱汗癖と爲りて惡し、反之夏期炎天に外出する時は、極く輕く薄き製造の例之ば白紗の帽子など冠らしめて、日光の直射を防止する樣注意するは甚だ宜し、尤も嬰兒の頭部を炎署の日光に逢はしむる如き外出は絶對に禁じ度候、故に頭部に就ての斟酌は、頭髮は天生の冠り物頭巾は人造、然れば人造の效は天生の工を補助するに過ぎざるのみと考へ置かれなば、須用上の參考と相成能く謬りを免れ得るならん。

(ロ)襟卷、是も亦た日常室内に在りては慣用すべからず、特に稍〻成長したる小兒には決して常用せしむ可らざるものにて、唯だ冬時又は春季の烈風など嚴寒肌を襲ふ如き天候に際して外出せん時、若くは風邪其他疾病にて、必要ある場合にのみ之を用ひられべし　若し平常斷間なく頭巾や襟卷に習慣せらるゝ時は、室外防寒の要具も遂に其用を爲さゞるのみならず、反て外氣に對しての抵抗力を弱ふして、感冒し易き僻を將來致すべし。萬一にも既に之に習慣せられし人は不得止候故漸く好時機を伺ひつゝ徐々に之を去らるべき事肝要なり、時候をも顧慮せず一時に除去ずるは宜しからず。例之ば初冬なる季節の如きにて、止む無ければ則ち其一寒期は注意しつゝ、室の内外に應じ厚薄二種を適用持續せしめ、明春を俟つて徐々に慣習を除くべし、是れ薄弱の嬰兒に對して相當の方と認め候、又た襟卷は柔かく輕きものを選むべし、而して之を尤も緩く纏ふ事を忘るべからず、總て小兒には緊迫といふ義を忌み申候、頭巾も亦た輕き廣きものが宜しく候。

却說、頭巾なり襟卷なり、特に衣服に就て、世間往々外觀といふ點にのみ省慮致し、他に注意せざる人有之樣なれ共、兎角感服致し難し、大凡そ衣服なるものは、寒暑風濕を防ぎ且つ醜體を覆ふの要具也彼等は此本旨を忘却せるより起る惡弊かと存候。一言

に申せば華美よりは清潔を貴ぶべし、巧に姿を粧はんよりは寧ろ衛生に適せん事を、望まれ度きものに候。然れば

（八）衣服は、晝夜とか、朝夕とか、若くは晴雨とか氣温とか、又は室の内外、若くは市街郊野の差別、等に因り能く緻密に考慮して、温に過ぎず冷に失せず、常に適當な調子を取る事肝要也。故に其著用數は終日一定を以て論じ難し。要するに小兒の衣服としては、輕く寛かに且つ單簡の製法を旨とし、加之長短の度を適宜にして、尤も運動遊戯に便ならしむるを要し候。殊に最も清潔なるを貴む、而して寒からぬ様に著するは必要なれ共、然りとて餘りに温暖のみ之れ事として、其度に過ぐるの慣習となれば、却て皮膚の機能を減弱し、遂に感冒し易き性癖と爲る事恐ろしく候。故に調度の衣服は、身幅大に廣く、襟肩狭からず、裄き長からず、丈けも亦た短き方が宜し。袖は割ぎ形にて口廣き方、緊き狭き筒袖よりも勝れり、附け紐は、兩襟に著けて卷き結びするは面白からず、恰も被布の紐附けの如く、短く其處にて相結び切る様にするが良し。又た胸幅の處を、注意しておくみ先きを廣く造るが宜し、私は從來の製法を改めて、おくみは尖りを爲さず、被布の如く廣く致したらば、胸と頸とを壓迫せずして宜しと、經驗の上より相信じ居申候、附け紐や帶にて胸腹を緊結壓迫するは甚だ惡しき事に候。斯くて衣服の製に注意するも、倘寒温を容易く調節せんには、巧みに羽織を應用するを至便なりとす（羽織の袖は有無適當に致して宜し、併し袖よりは背の邊少し厚く綿を入る方便なり、卽ち晩春初冬の如き、朝晝夕の氣候著く變化する時節に在ては、朝夕必ず之を著し、晝間速に之を脱し、又た戸外出遊には必ず之を著、室内に歸れば忽ち之を脱ぐ、如斯せば甚だ簡單にして被脱共に、綿入衣等の如く面倒ならず、其面倒なるは放擲の基となり易く、放擲卽ち懶惰の因と爲り、懶惰遂に衛生上の缺點を將來するに至る、是れ結果の止むを得ざる所にて候。

製服の物質は、綿、絨毛、麻、各時節に從ひ、服類に應じて、各人の選擇に任す、何れも皆な佳なり。併し小兒の衣服としては、尤も便利に且つ屢々洗濯し得らるゝものにて、又た汚れ易からぬものこそ良しけれと存候。製法にも此意を注ぎ申度候。其他襦袢としては、廣袖筒袖孰れも可なり、胴衣と股引即ち衣と袴との形に分つも善く、或は續くも良し、或は毛織目利安などの「シャッツ」類を用ふも妨げ無し。然れど目利安は兎角窮屈に爲り易き故に、嬰兒用には好ましからず、肌著は毛織質のもの尤も適し可申、但夏季は綿麻却て宜しく候。

足袋は、毛編み、毛布、紋巴、木綿、何れにても宜し、唯其製造を寛廣にして緊迫せぬ樣に注意す。紐も亦た強く結ぶべからず、但し就褥の際には必ず之を脱ぎ、離褥の後再び速に之を穿かしむる事とす。

(三)履物は、木履、草鞋、靴、何にても宜し、要は輕く且つ寛く緒も亦た固からずして、而かも步行に尤も便利なるものを選むに在り。木履の高きものは禁ずる方安全なり、實に顚倒と緊迫とは足脚を害するの恐有り候。

嬰孩は申す迄も無之發育の尤も盛なる時期なれば、帽子より履物に至る迄、總て皆な其育成を妨害せざる事を目的として選擇せざる可らず、重きを感じ窮屈を覺へしむる如き、物質と製法とは、尤も禁忌なり、帶紐を固く結ぶも亦た惡し、然るに世間往々、未だ背丈けも延びざる短小の兒體に不相應なる、振袖ヤ廣帶ヤ「ボックリ」と稱する高き下駄など用ゐさせて、恰も玩弄同樣の取扱を爲す人あるを見る、是等は即ち我が愛兒を土偶と心得居る無慈悲者の戯とほか評し得ず候。身神の美なるを願はずして、徒らに形體の華奢を望み、以て衛生保育の主旨を忘却するが如きは、金銭を以て世に誇る馬鹿者と惡罵されても辯解に道無き程に御座候、呵々。貴家御出入の人々などへ宜く御諭し、健育の方を盡させ被下度候。

(ホ)食物、嬰兒に尤も適當なるは母乳にて候事勿論

なり。若し實母に故障あれば乳母を選むを最良とす、古人の金言に『母の乳は吾が兒の爲めに分泌す』と有之候、眞に然り、此一言は既に實母が其愛兒に授乳すべき天職を命ぜられ、而して決して〳〵濫りに廢乳すべからざるものであるといふ事をも申し盡したりと認められ候。母として授乳を廢すべき止を得ざる理由も無之、唯だ自分の便宜のみといふ點より之を廢し、濫に乳婆を傭ふが如き事あらば、其人こそ實に天命に背きたる罪人也と申すべけれ。

實母たる人に乳量の不足、乳性の不良、若くは不慮の疾病等、然るべき事情ありて、遂乳婆を傭ふ事と爲れば、則ち信用せらるゝ醫家に其選擇を協議せられ度候。若し乳婆を傭ひ難き場合か或は傭ふたる乳婆に忽然病の起りたる際等、實母乳母兩ながら授乳し能はざる事情に遭遇したる時は、是亦無上の不幸と謂ふべく、然る時は據無く人工滋養料を選取せざるべからず。人工滋養とは、實母乳母の天然的に對したる語にて、人爲を加へて用ふるからの稱なり。

即ち普通には牛乳を第一とし、次に山羊乳、其他緜羊、驢馬、等の乳も採用致候。併し羊乳、驢乳の如きは到處に得難く、從て不廉、加之一種の乳臭あるが故に、牛乳に劣れりと爲す。但し牛乳にも其性狀兎角良惡の差無きにあらず、故に信用ある醫家の指定を請はれたらば安全ならん。往々牛乳若くは乳婆等より或る疾病を傳染することも無きにしもあらず可畏なり。假令重惡なる疾病を受けざるも、而かも不良の乳汁なれば小兒の成長に利益する事なし。然のみならず特に時發的の疾患（例之は消化不良胃腸加答兒等の如し）等を喚起する事あるものとす。

世間には往々、母乳の效能を知悉せずして牛乳を非常に賞用する人あり、如何に素人なりとて是は大なる誤にて候へば、之を輕々に看過するは惡し、宜しく訓戒致すべき所に候。牛乳の母乳に勝さる理由は決して〳〵有之申さず、善良なる母乳の小兒に及ぼす效能は復た格段なるものにて、所謂人工滋養料などの遠く及ばざる所にて、即ち前にも申せし如く、

乳汁は吾が兒の爲めに分泌するものなれば、牛乳は犢牛に對して能く適當すべき性質を具へて分泌するものなりと認む可く、然るを人智の巧妙を加へて始めて人間の嬰兒に應用するを得る、加之それに因りて初めて效能もありと稱せられ候が事實にて候。若し人智を加ふる無ければ、往々不相應にて效能も皆無と相成申すべく、其所が卽ち人工養料の人工たる所以に御座候。

（未完）

病兒看護の要領（承前）

初生兒及早產兒の疾病

○○○産瘤と頭血腫　分娩が長引きまするど、前に進み出た頭の皮膚の一部分が腫れまして、之に觸れて見れば、軟かで丁度粘土にでも觸はるやうな感じが致します、而して其部分は紫色になつて居る、之を產瘤と申します。是は別に危險のないもので、大抵一日か二日の後には退いてしまひます。

頭血腫と申しますのは、是とは反對に、往々產瘤が吸收された後に初めて目につくやうになりまして、骨と骨膜との間に血液が溜つて出來るのであります、是は長い間退かず、往々一個月餘も腫れて居ることが御座います。併し是も大抵危險は無い、只何うか致しますと化膿することがありまして、其時には直に手術する必要がありますから、兎に角醫師に視てもらつて置かなければなりません。

○○臍炎　臍の傷痕は、生れてから三週間程經ちますれば全く皮を被つてしまふものでありますが、間々炎症の狀態を呈して來ることがあります。これは殆ど常に取扱ふ人が十分防腐的に行はなかつたと云ふことに罪があるのであります。

此の場合には早速手當をしなければなりません、臍の炎症は容易に廣がりまして、臍の內部にまで侵入し、腹膜炎を起したり或は全身の血液中毒、卽ち腐敗症などを起しまして、大抵これが爲に死亡するやうなことになるからであります。それでなるべく早

く醫師の治療を受けなければなりませんが、醫師の參ります迄の手當と致しましては、先づ醋酸礬土水に浸したガーゼを水の垂れぬ程に絞りまして、臍の上に貼て、その上に油紙を置き、綿で被ふて輕く繃帶を施して置くのが宜しい、(醋酸礬土一食匙をコップ一杯の水に溶かす)。又此の病氣の時には、之を取扱ふ人も、危險の腐敗症に罹ることがありますから、消毒法を嚴重にすることが必要であります。

○○丹毒　これは其の部分の皮膚が赤くなり、普通その赤い部分の堺が明瞭で少しく腫るので分かりますがこれは母親にも危險でありますから、丹毒に罹つた小兒は別の室に移さなければなりません。

○○○膿漏眼　これは能く人の知つて居る風眼と云ふもので、最も危險の眼病であります。眼病に罹つて全く盲になつたと云ふものは、これで盲になつたのが一番多い。近來はクレーデ氏の法と稱して、小兒が生れると直ぐに產婆或は醫師が硝酸銀水の點眼を行ひます、これは風眼の豫防としては非常に大なる效を奏して居りますが、尙ほ世間には之を嫌ひまして、宅の子供に限つて左樣の必要はない、痳病などのある者は私の家にはありませんなどゝ威張る老人がありますけれども、必しも痳病でなくとも、風眼と同樣の病狀を發することがありますから、これは是非行ふべき方法であります。

此病は大抵生れてから二日乃至四日の間に起りまして、最初は、只僅かに眼瞼が腫れて赤くなり、目尻の處が眼脂で粘る位のことであります。然るに其翌日に至りますと、眼を開けますと內から帶黃白色の稍や濃厚液體が流れ出しまして、暫時の中に眼もその周圍も腫れて、淚は全く膿になつてしまふのであります。それで少しでも其の疑のある時には、最初少し赤いやうだと思ふ時に直樣醫師の診察を受けなければなりません。而して此際には醫師の言ふ事は嚴重に其通に守ることが必要であります、例へばガーゼを氷の上に載せて置いて、五分間每に眼の上のガーゼと交換せよとか、十五分每に藥液で膿を拭き

取れとか、健康の眼を下にして寢かしてはならぬとか、種々の注意を致すでありませうが、これは一々嚴重に守らなければなりません、隨分煩はしい看護でありますが、これが一人の人を眼明にすると盲目にするとの境でありますから、如何なることも厭ふべき場合ではありません、時計を傍に置いて晝夜その看護に勤め、夜間は他の人と交替して手當を盡すやうに致します。右の通醫師の言ふたことだけを確實に守ればそれで宜しいのでありますが、殊に注意すべきことは、膿が能く眼瞼の下から洗ひ出されて中に溜つて居らぬと云ふことであります。膿が暫らく眼瞼の下に溜まつて居りまするとこれが角膜(黑目)を腐蝕して破壞し、眼球の中の水が漏れ出し、其奥に在る水晶體が脱れ、遂に失明の不幸に終ると云ふやうなことになるのであります。小兒は常に惡い方の眼の側を下にして寢かすと云ひますのは、その膿が流れて善い方の眼に這入らぬ爲めの用心であります。

次に之を取扱ふ人も十分其手の消毒に注意しなければなりません、少し不注意にして其の膿のついた手を以て眼をこすりますと、忽ち自分も風眼に罹ります。從て其兒の母もこの傳染に對して十分警戒することが必要であります。

(以下次號)

哺乳に就て

醫學士　井上吉之助

胎兒が分娩して後、初めて母親の乳房に著けると誰れが敎へるのでもないが、誠に巧妙に吸ふ事を遣るのである、之れは言はゞ小兒の先天的否本能的の能力と認められる働きであるのである。健康に產れて來た初生兒であれば特に勉めて、乳房に着かせる事に骨を折らずとも自然と出來るのである。

今小兒を暫らく休ませて、多少腹の空いた時に、母親の乳房に着けてその乳を飲む有樣を見ると、初めの間は非常に早くそして、一心に飲んでゐる、指を

咽喉の上に當てゝ居ると一度々々に嚥下するので、咽喉の所が上下に動くのが解かる、それが一二分吸ふて居ると此度は二度か三度吸うては一度嚥下する樣になる、尙後になると五六回吸ふたのを口にためては之れを嚥下する樣になる、何故その樣な事をするかと言ふに初めには乳が澤山に乳房の中に蓄積して居て、從つて速かに出るのであるが、後には出方がだん〳〵ゆるくなるので嚥下するだけの分量を口の中に集めるには數回吸はねば足りない樣になるためである。

如上の事は小兒が飲んだ量を目方にかけて見ると尙明らかに解かるのである、ある一回に飲む乳の量は、その大部分は飲み初めてから二分乃至五分の間に取つてしまうので、例へば一回に百五十瓦の乳を飲むとすると、其の中の百瓦は初めの三分乃至五分の中に已に飲んでしまうもので、あと十分又は十五分乳房に著いて居ても僅かに五十瓦を取るに過ぎないのである。

最初乳房に着けた當座飲む速度と言ふものは、驚ろくべく早いものであるから、今若しある目的を以て哺乳兒の飲量を減少しようとして其の時間を制限する必要が起いた時には十分思い切つて其の飲む時間を短縮してよろしい、例へば十五分飲まして居たものを十分位に短縮しただけでは實際に飲む量から言ふと別に大して減少して居はいのである、終りの五分間に飲む乳の分量は大概知れきつて居るものであるから、十五分の所を五分にでもすれば初めて其の減少の目的を達しられるわけである。

それと同樣に乳を飲ませるに當つて永く何時迄も飲ましてをくのは少しも益がない許でなく、むしろ誤りである、その飲む時間は多くは小兒の方から規定せられるのである、と言ふのは哺乳兒が乳を十分に飲んだ時には自づから乳房を離なれ、又滿腹すると共に、飲む事で疲勞して直ぐに寢入るのである。

飲む量と乳腺の分泌の働きとは相互の關係となして居るもので、また一方には乳の吸い方に因つて分泌

の働を左右する事が出來る、力強く吸へば、從がつて澤山に乳が出る樣になるし、反對に吸い方が弱い時には分泌の量も亦少ないのである、それから又永い間吸わせずに休まして置いた後に吸わせると乳の出方が早く且澤山である、從つて多量の乳を哺乳兒が飲む事が出來るわけである、之れに反して、ちよく〳〵と少しの間を置いて飲ませると乳腺で分泌する、そばから飲みほされてしまうので、澤山に出るわけがないのである。一般に夜の間は永く休むものであるから、朝は一番多量の乳を飲む事が出來るのである。

扨て一度々々の哺乳の間の休息時間は、どの位にするのが尤も適當であるかと言ふに、一般に哺乳兒は其の乳を飲む間の時間は殺て殘すものである、であるから健康な小兒であれば自然と其の間に一定の適當の間隔を作る事になるのである、殊に生後一ケ月位の者にあつては、その間の睡眠は深いのである、爲めに必然の結果日に五回以上は飲まぬ事となる、少なくとも六回時には又日の中四回になるのもある哺乳兒が眠りから覺めて、乳を求める時に與へるのである。

然しながら、かく一定の時間を休む事なく屢々欲しがるか、又は不規則に乳を飲まうとする者に對しては嚴重に規律を立てゝ日に五又は六回と定め卽ち三時間乃至四時間毎に與ふる事にする、そして夜は是非共六又は八時間を休ませねばならない、此の規定は正しく守つて終始換へてはならない、又中絶せぬ樣に心掛ねばならぬ、若し一度夜に哺乳する事があると、ついで再びやらねばならぬ樣になる、そうすると今迄の習慣が破れ、それを舊の如く復する事が困難になる、少さい暴君は夜に必ず烈しい叫聲を上げて乳を望み、父や母の眠りが障碍られるのである。

哺乳兒が不安の樣子をし、喧しいのを見たとき、いつもそれが空腹で、乳を欲して居るものとのみ考へるのは早計である、その他の原因で喧しく泣く事がある、例へば襁褓が濡れたとか、著物の著け方に不

都合の所があるとかで不安を現はす事がある、そう言ふ時、何にも頓著なく乳を飲ませると一時は噪を止めるが、もと〳〵の原因が取り除けられはしないのであるから、また直ぐと喧しくなる。

次に一回に飲む所の分量は上にも言ふた通り毎常一定とはゆかない、一般に朝は多いのである、然し一日の飲量を通算してどの位飲むものであるか、それと身體の發育との關係はどうであるかを見るに、其れには一々、乳を飲む前と、飲んで終つた後とで體量を計りその差からして飲んだ量を定めるのである斯くの如くにして其の飲む量を調べたる所に依ると初め生後一週間は最も速かに增量し其の後の五六週迄は漸次に飲む事多くなるが六週目頃が頂點で、その後に於ては殆ど變りがない、體量は漸次增加して行くに拘らず、飲む量は大して增す事がない、平均すると三週目の哺乳兒も五週目のも又七週目のもその一日に飲む乳の分量には大差がないのである、之の事は一寸異樣に思はれるので、一般の人は小兒が日を經れば經る程、月を重ねれば重ぬる程益々餘計に飲む樣に思ふが實際はかくの如く多少增加はあつたにしても生後二ヶ月以後は殆ど同量の乳を飲んで居ると見て差支ないのである、其れを數字に現せば一日に六百瓦乃至八百瓦の母乳を飲む譯である、時にはそれ以上に九百又は千瓦を飲むのもある、之の點は人工榮養をするものに對して又參考になる事で母乳で千瓦が極大の量であれば牛乳を與へる時でも千瓦以上は不可である。

それから一度の哺乳時に一方の乳房のみから與へるか、又は兩方の乳房よりするがよいか、若し母親の乳が十分に出て、一方小兒も健康であれば、一回に一方のみの乳を與ふるがよろしい樣である、そう言ふ場合に兩方を與へると何れの方も空になる迄飲むに到らない、そうすると多少乳腺の分泌にも影響を及ぼすものであるから、一回に一方を十分に吸はせて空虛にし、次の時間には他方を出來るだけ吸はせる樣にする、然し之の事は多少乳の出の良くない樣

の時には考へものである。

家庭衛生

初秋の衛生

根津元可

天高く馬肥ゆる今日此頃の秋の季節は、單に馬ばかりではない人も肥ゆべき時節である。五穀の熟すると共に、海に山に珍味佳肴の材料が盛に産せらるゝ、これに相當して自然の妙機は、氣候の關係から今まで怠惰がちなりし人體を元氣づけて、再び活潑に仕事をし、愉快に運動するやうにし、大に食慾を振はし、消化機能を盛にする、斯くて自ら暑中の衰弱を恢復し、來るべき寒冷に堪へ得るやうに身體を準備せしむるのである。吾人は宜しく此の天意を諒解し、此の機會を利用して身體を改造し、ますゝゝ強健なる身心を修養すべきである。

斯の如く秋は身體の爲にも精神の爲にも修養の最好時期であるが、夏と秋との行かひで、秋に入る初に方ては案外に病人が多い、死亡者も比較的多數になるのが常である。これにはそれだけの原因がなければならぬ。此の原因には殆ど避くべからざる自然の原因もあるが、大部分は不注意より病を招き、死を求むるのである。依て今初秋の衛生上注意すべき個人の養生法に就て、二三大切と思ふ個條を述べて參考としたいと思ふ。

飲食物

秋の初には赤痢、虎列刺等の消化器を侵す猛烈な傳染病が多く發し易い、これは最も恐るべきことである。併し消化器を侵す傳染病は、口さへ愼めば少しも恐るゝに足らぬのである。詳しく云へば病原菌の附著し又は混じて居る飲食物を口に入なければ、決して罹る氣遣はないのである。然るにこれが暑中よりも多くなると云ふものは、要するに夏の中は愼む

で居つた衛生上の注意も、もう涼しくなつたからと云ふので油斷して、急に不攝生を始めるからである。それで赤痢の如き傳染病ならざる迄も、一般に消化器病が多くなる傾がある。殊に小兒は種々の果實、就中不熟の果實を貪ぼり、往々殻皮を去らずに食し、これが爲に消化器を害することが尠なくない。これは小兒には限らぬ、大人と雖も、食慾の進むに任かせて盛に飲食を貪る、多量に榮養物を攝取するのは結構なことであるが、急に多量にするのは宜しくない、尚ほ暑中は非常に愼みて敢て食べなかつたものも、少しく涼しくなると急に珍らしげに貪ぼる傾がある、例へば天浮羅とか、餅菓子とか、刺身とか云ふものを貪ぼる、又は酒も澤山に飲むと云ふ風で、これが危險を招ぐ所以である。

要するに秋季の食事攝生とて敢て特種の攝生法がある譯ではない、涼しみが起つたからと云ふて、今迄愼て居つた食物を急に貪ぼらず、急に多食せず、赤痢等に對する用心は夏よりも一層嚴重にして、漸次肥る工夫が肝要である。

衣　服

飲食物と同じく衣服も亦秋の初には兎角急に著過ぎる傾がある、昨日まで單衣で居つたものが、少しく秋らしくなつたと思ふと直ぐにネルの著物を著、羽織を重ねる、今日は涼しいと思ふたが翌日は再び殘暑の後戻りと云ふ風に未だ氣候が定まらないので妄に衣服の調節に急がしい、一室の中に帷子もあればネルの著物も出て居ると云ふ有樣である、斯樣に氣溫に應じて迅速に衣服を調節するのは誠に衞生的のやうに思はれるが、實はこれが寒冒に罹り易い原因である。元來人間の皮膚は外氣の溫度に對しては、人工的に衣服を以て溫を調節するよりも遙に適度に自ら溫を調節する機能を有して居るものである、それが種々の事情から普通一般に絶えず衣服を纏ふやうになつた以來、一時も無くてならぬものゝやうになり、從つて大切なる皮膚の溫調節作用を等閑視し、皮膚も亦漸次脆弱になつて、今日では死人の如き於

白き薄弱な、鈍き皮膚となつて仕舞つたが、それでもシャツのやうな物を脱ぎ棄て、單衣を纏ふて居れば、僅かに夏の間だけでも、幾分か皮膚らしき皮膚の働が恢復される、それを例の死人の皮膚同樣全く何の働きもないものと心得、總て衣服のみを以て外の溫度に適應しなければならぬものと思ふて、少し寒ければ直ちに厚著し、僅かに溫かければ直ぐに薄著をする、それで皮膚自然の機能が攪亂されて容易に風を引くことになるのである、試みに家の中だけでも宜しいから一夏裸體生活を實行して見たならば何の位衣服は不快なものであるか、皮膚は何の位能く働くものであるか解るであらうと思ふ、とても衣服を以て拔目なく適度に外氣溫に調節せしむることの困難な事が明かにわかる、常に過溫、過冷である、併し今日の所では再び裸體主義の實行も六ケしいから止むを得ぬ次第ではあるが、常に吾々の皮膚は衣服よりは遙に目的に適せる立派な衣服であると云ふことを忘れてはならぬ、故に秋の初に方つて少しく涼しさを覺ゆるからと云ふて直ちに周章てゝ厚著をし、天候の具合で再び暑くなつたと云ふて帷子を著ると云ふ如く狼狽するのは、衞生を重ずるやうで實は誤つて居る、もう少し沈著に徐ろに衣更をしなければならぬ。少々の寒い暑いは、皮膚に於て十分調節し得るから決して心配するに及ばぬ、反つて餘計な心配をして風を引くのである、若し氣候の僅かの變化にも適應し得ぬ程皮膚が墮落して居るならば、宜しく裸體になつて皮膚を鍛え直して人間本來の健全の皮膚にしなければならぬ、これは甚だ容易な事である。

次に夜具蒲團の類もさうである。夏の間は殆と掛蒲團無じで薄い寢卷一枚で睡眠したものを、急に縕袍を著、蒲團を掛けて寢に就く、實にそれ程寒いのではないが、昨日迄の暑さに比較して僅かな溫度が降つても非常に寒いやうに感ずるのである、寒い溫いと云ふのは全く自分の身體に於ける比較上の感覺である、その證據には屍體に觸るれば非常に冷たく感

する氷のやうだと形容する、然しそれ程冷たいのではない、生きて居る人の體温に比較して考へるから非常に冷たく感ずるのである、熱病患者の額を觸れて見て燃ゆるやうだとか火を吐きさうだなどゝ大袈裟の形容をするのもその爲である、斯樣な譯で、秋の初に二三度氣温が降つても今日は縮上る程寒いと感ずるのである、而して衾を重ねて寢に就くが、實際は左樣に寒いのではないから夜中に知らず〳〵蹈脱いで仕舞ふ、此度は過温の狀態から急に温を低くされるから得て寒冒に罹り易い、此等が初秋に於ける衣服上の注意である。

住居

日本風の家屋に於ては、夏と秋とでは、其室内の空氣は著しく異つて來る。夏は戸障子を殆ど開放して風を通すやうにするが、少しく涼しくなれば再び戸障子を締切つてしまふ、夏は殆ど野外に居るも同樣、直接に外氣を呼吸し、光線も十分に室内に入るが、秋に入るや直ちに閉鎖して冬も同然である、未だ火鉢や煖爐に依て甚しく空氣を不潔にするに至らざるのみにて、その光線の射入を防ぎ、空氣の流通を阻害することが著しい、障子や疊で出來て居る室であるから西洋室の硝子窓を悉く閉鎖したよりは自然に空氣の流通はある譯であるが、夏座敷に比すれば甚しい相異であるから、一日此内で仕事をする人の衛生上には大なる利害の差を生ずる、實際今迄開放つて置いた室を急に障子襖を以て閉ぢ切つて、其中に仕事をするならば、非常に陰氣で不快を覺ゆる、これは單に氣分の上ばかりではない、確かに室内空氣が不良になるのである。これ亦大に注意すべきことで、建築上の改良を要することゝ思ふが、せめて各人に於て樣斯な衛生上の不利益をなるべく免れる工夫をしたいものである。

そこで秋の衛生として最後の希望を述べなければならぬ。と云ふのは郊外散歩である。我國の秋は實に一年の中で最も郊外散歩に適した時である。郊外散歩は何人にも最も適當な衛生上最良の運動法であ

る。これに依て上に述べたる初秋の衛生上の注意の足らざる所は總て補はれる、呼吸氣の爲めに、消化器の爲に、五官器の爲めに身體精神一切の爲めに、これ程良い衛生的の方法はない、敢て個々の利益を述べないが、秋天朗かなる土曜の午後より、日曜の朝より、二三の友人と共に近郊に遊ぶならば、其利益の空しからざることは少しく衛生思想あるものの何人も明かに感得し得ることゝ信ずるのである。

飴の造り方

水飴は婦人、小兒、老人、病人などの滋物としてかなり昔から珍重されて居ります、實際適當の榮養品であります、分析表に依て見ますと概略左の如き成分になつて居ります、

糖分	六九・三七	糊精	一五・五五
水	一四・〇六	含窒素物	〇・六一
脂肪	〇・〇二	灰分	〇・三九

人體の榮養に必要な總ての養素を含むで居りますが其の特有な成分は糖と糊精とでありまして、この二成分が最も多量に含まれて居ります。糖は麥芽糖と云ふ砂糖で御座いまして、總て澱粉質に麥芽即ち俗にモヤシを混ぜますと出來るものであります。又糊精と云ひますのは、少し褐色を帶びた粉で御座いまして、これを水に溶けば非常に粘著性を呈はすものであります、謂はゞ糊の素で、印紙の裏に塗つてある糊は、此の水溶液で御座います、水飴の粘著性は、この糊精を澤山含むで居るからであります。

さて水飴を造りますには、先づ右に申しました麥芽が第一の種でありまして、此さへ用意致しますれば原料には穀類又芋類總て澱粉を多量に含むで居るものなれば何でも一種の飴が出來る理であります。普通水飴の原料として用ゐられますのは、糯米、粟等で御座いますが、丁度只今は甘藷の盛で御座いますから、御試しになるに都合が宜しからうと存じまして甘藷より造る方も申上げませう。

面倒なのは麥芽を作ることでありますが、先づ之を

作ります要領を申上ぐれば、粒の揃つた上等の大麥を求めまして、二晝夜程水に浸して置きます、而して水を二三回取換へまして、指で壓つぶして白い水が出て、小さな芽が現はるやうになりましたならば莚のやうな物に上げまして、濕氣を保つたまゝ程良く温に致して置きますと悉く芽を吹きまして、三四日經ちますと根も芽も延びて參ります、そこで之を焙烙の中で焙りて芽を殺し、臼にて磨いて粉にするのであります。此中にはヂヤッターゼと云ふ酵素を多量に含むで居りまして、既に麥の澱粉の一部分はデキストリン更に其上の糖分に變化されて居るのであります、兎に角これが飴を造る第一の原料で御座います。

西洋でも此から小兒の人工榮養品を製して居りますリービヒ氏の滋養藥汁などゝ云ふものも之で製したものだと云ふことであります。麥芽越幾斯と申しまして矢張水飴でありますが、其の製法は麥芽と水を等分に混じ、六十度以下の温度にて三時間温浸し、更に水四分を加へて一時間温浸し、次で之を煮沸して濾過し、なるべく速に蒸發せしめて製します、帶黃褐色の甘い濃厚のエキスであります、此中には含窒素物八・〇デキストリン二五・〇葡萄糖三〇・〇鹽分三・五を含み、水には透明に溶解致します。

右は西洋の水飴で所謂麥芽越幾斯と稱するものであります。本邦の水飴も殆ど同一物でありますが、粟や糯を原料に用ゐ多少製法を異に致して居りますので、先づ特製品であります。大體を申しますと、上等の糯を赤飯にする時のやうに蒸しまして、體温位にさめた時分に前述の麥芽と湯を加へて十分混和致します、その割合は蒸米三升に麥芽一升と微温湯一升程の割合であります、而して之を冷えぬやうに保温して屢々攪拌ますと、朝に仕込めばもう晩には大分甘くなります、それから之を麻袋にて搾り、それを又金巾の袋にて搾り、その汁を鍋に入れて攪拌しながら煮つめ、糊の如き固さになつたならば、火より下して沫を除きそのまゝ徐々に冷却するのであり

ます。
甘藷より造りまするも、蒸した甘藷を擂鉢の中で煉りつぶし、百に一の割合に麥芽を加へ、よく混和致します。それから一時間程たちましたならば、藷を蒸した釜の湯が程善く微溫くなつて居りますから、それを少しづゝ加へてドロ〳〵にし、又一二時間を經て袋にて搾り、前述の如くにして煮つめるのであります。
此等の水飴は稍や赤味を帯びた黄色の濃厚液でありますが、之を更に煉て水分を少なくしましたのが、彼の翁飴とか、笹飴とか云ふ類の飴で、尚ほ幾度も煉て引延し引延し致しますと色の白い所謂引飴、晒飴と云ふ種類のものになるのであります、糖分は粟水飴が一番少なく味も淡泊であります、分析表の一部を左に掲げて置きます。

	水分	糖分 アルトーゼ	糖分 デキストリン
糯水飴	一九・一六	七三・五〇	七・三四
粳水飴	一九・七二	七四・〇八	六・一九
粟水飴	一六・五一	一六・五一	二一・一九

看護法（承前）

（ホ）四肢

四肢では外傷が多い、これは後に至て別にお話をすることゝし、一部分手足の運動が制限さるゝことがあります、即ち剛張つて居るとか或は全く痲痺して居るやうなことがあります、又ひどく瘦削て居る或は甚しく腫れて居る場合があります。その腫れて居る或は浮腫で居るのは他に水腫のある如き場合でありまして、斯様な四肢を指にて壓して見まするど、暫らくは指の壓した痕がついて居ります。又關節の腫脹することがありますから、これにも氣をつけなければなりません、即ち關節ロイマチスとか關節水腫などの場合であります。
四肢には又搐搦或は痙攣を認めることがありますが茲にはその緊要な事柄だけを簡單に申述べて置きま

せう。
先づ普通に強直性痙攣と間代性痙攣とを區別致します。強直性痙攣と申しますのは數分間或は數十分間も筋肉が引つりて剛くなるのを云ひ、間代性とは筋肉の縮收と弛緩とが交代性に起るのを申すのであります。この前の方の痙攣は、例へば破傷風などの時に起りまして、筋肉が收縮して硬くなり、往々身體が弓形に後の方へ曲ることがあります。後の方の痙攣は癲癇等の場合に見るものであります。癲癇の時には多くは急に倒れて氣を失ひ、手足を同時に搐搦まして、顔は帶青赤色になり、眼は凝つて、瞳孔は光をあてゝも動かず、大抵口に泡を吹き、舌に傷をするものであります。

これに對する取扱は、怪我をせぬやうに氣をつけると云ふことであります。歯の間に挾まつて居る舌は之を後にもどし、手足を地に打て傷をせぬやうに凝かします。手を握つて居ります時に、強て指を起したり致しますが、これは無用のことであります、そのまゝにして置て少しも差支はありません。

種々の痙攣を起し、往々全く癲癇に類似の痙攣で、又強直性の痙攣を起しますものはヒステリー患者であります。併しヒステリーに於きましては大抵瞳孔の反應があります、即ち瞳孔に光線を落しますとそれが小さくなり、光を遮けると復た大きくなる、これは癲癇には決して無いことであります。

醫師が此の患者はヒステリー性であると申すことが御座います、斯樣な場合には大抵氣の縺り易い又氣六ケ敷い病人で御坐いまして、一見快濶さうに自分の病氣に就て物語り、又その苦痛を非常に大袈裟に仰山らしく話すものであります。斯樣な患者に對しては、醫師は往々言葉も簡單に、力強く對抗し、斯樣な病人は只種々の病狀を想像するに過ぎないと云ふことが御坐いませう。

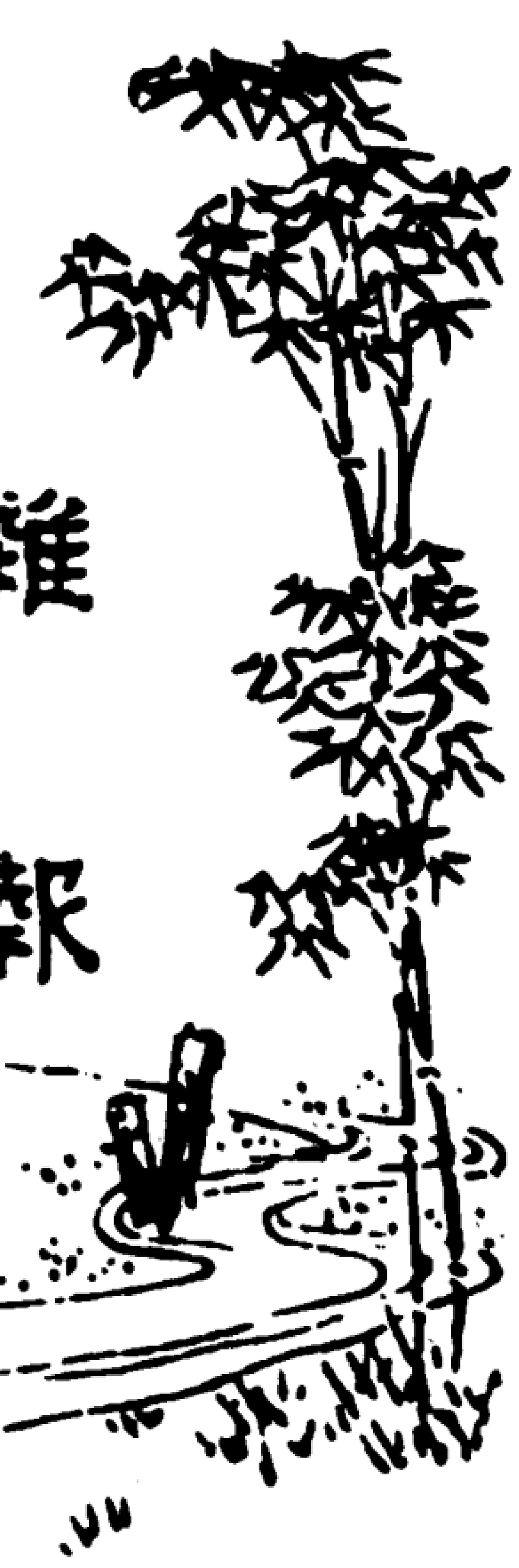
ヒステリー患者と申しますものは、人の云ふ通り、病氣の役者のやうなものでありまして、疼痛、痙攣、嘔吐、其他種々の病狀を現はしますが、巧に取扱ひ

ますと、只話をしたゝけでも虚言のやうに悉かり治まるものでありますから、これは佯病を使ふとか、尫弱者だとか大變惡い意味に取られる傾が御坐います。併しこれは決して佯病ではない、實際斯樣な一種の病氣であつて而かも實に憐れむべき困難な病であると云ふことを心に止めて看護してやらなければなりません。ヒステリーは意志の力が病的に弱くなり、諸器官が刺戟性に過敏性になる病氣でありますそれで健康な人に較べますと、種々の病苦を非常に大袈裟に感ずるのであります。

斯の如き病人を取扱ひ、看護致します時には、嚴格と親切と中庸を得るやうに、卽ち寬嚴その宜を得ると云ふことが最も大切なことであります、そこで、同情を以て信任を獲ると云ふことが最も必要なことで、ヒステリー患者に一度嫌はれた以上は醫師も看護婦も到底手出しは出來ません、それで十分病人に信賴せしむるやうに務めなければなりませんが、併し病人が樣々な感じを誇大に訴へる時に、餘りそれに附いて、さうであらう、さうであらうと釣込まれてはなりません、必要の場合には嚴格なる言葉を以てこれに對しなければなりませんが、この際決して荒々しい粗暴の言などを發してはなりません。

（以下次號）

雜報



○御大喪と衞生

去る十三日の御大喪に就ては、內外人の都下に參集するもの非常に多數にして、氣候も未だ暑かるべく諸種傳染病流行の季節なれば防疫上の警戒を嚴にするの要あり、又御葬列御通過の沿道に於ける奉送者の雜踏も如何なるべきかさ想像に餘り、從て以外の傷病者を出すなきやの慮あり、尙ほ宿屋料理店、飲食店の取締、精神病者、癲患者に對する顧慮等、衞

生上の取締に關しては、當局の苦心實に一方ならざりし由なるが、その甲斐ありて他の一般の施設と相俟つて不思議なる程萬事整然として、殆ど何等の失體なく嚴肅に無事に御本送申上ることを得たるは眞に當局者の苦心と其周到なる設備とに對して感謝せざるべからざるなり、右に關する當該諸官公所の施設一般を聞くに左の如くなりしと云ふ。

▲各區醫師等及東京醫會との連絡

傳染病の豫防に關しては直接其の任に當る警察官吏防疫醫員等如何に萬能なればとて元より數に於ても制限され且つ實際を根柢まで立入り遺憾なく防壓の效を奏する事は出來難き事情もあれば此際一般開業醫と相互氣脈を通じ傳染病疑似患者の早知方法、患者屆出の敏速、病毒傳搬系統の闡明、合理的の消毒實行等を勵行し御大喪に關し特別の便宜方法を講ずるの必要より本月一日東京市內各醫師會及東京醫會の代表者を警視廳に招集し傳染病豫防上に就き栗本第三部長より懇談する所ありたり

▲宿屋料理屋飲食店及理髮店の取締

御大喪前後は宿屋料理屋其他飲食店の繁盛すべきは無論のことにして從つて此等營業所に於ける飲食物、飲食用器、及寢具喉壺等に對しては十分の取締を要すべく又理髮店に於ても前記宿屋等の如くに顧客に充たさるべければ店舖の清潔、理髮用器具の消毒等は一層勵行の要あるべきを認め右等の取締のため警視廳より從來の視察員の外新に醫師藥劑師等十數名を增員し去月十日頃より一齊に各營業所に對し取締を實行せり

▲清涼飲水及氷の取締

是亦夏季に於て取締を要するものなるが昨今市內に販賣さる、清涼飲料水殊にサイダー、ラムネの類に至りては異物の混入せるもの內容の溷濁せるもの甚しきに至つては全く腐敗したるものを供給するもの多數ありて最も注意を要する時期にあり殊に御大喪前後は一層の注意を以て取締を嚴にすべく是亦視察員を倍加し着々實行せり

▲精神病者看護取締

精神病者にして監置中のものは一層嚴密なる監視を勵行すべきし此際不監置精神病者市中に徘徊することあれば甚だ不體裁なるのみならず平素自他に危險なきものと雖も道般の出來事に依り精神興奮の結果如何なる椿事を惹起するやも計られざるべく其れがため警視廳警察醫數名各地に巡廻して不監置精神病者に就き臨時診斷を施行せり

▲癩患者の取締

多人數雜沓を見込んで各地より東京市內に參集する癩患者中浮浪徘徊するもの所謂乞食の徒は悉くこれを引致して癩療養所に送致し御大喪當日醜體を路上に散見するが如きは斷じて無かりし

▲野犬捕獲と畜犬繫留

當局は從來とても野犬の捕獲を勵行しありし爲めに近來は野犬の數大に減少の傾あるも猶全然市內に野犬の橫行を斷つこと能はずして甚だ遺憾の狀態にあり此際多人數の集合に際し萬一狂犬の發生ありては都市衞生の面目にも關することなれば此際一擧して殘類を屠る意氣込を以て一大野犬狩を實施せり

▲道路撒水と公共水栓の增設

東京市の施設として御大喪前後市內一般に撒水を勵行する筈なるも殊に御靈柩御通過の沿道には普通水に代ふるに「ニガ鹽」を以て

し塵芥の飛散を十分に防止する方法を採り又沿道奉送者の飲料として沿道筋に新に十數箇を増設し一般の便を計りたり

▲街頭便所の増設と掃除勵行

御通路に當る街頭便所にして位置不適當のものは之れを撤去し必要なる場所には多數の假設公共便所を設け又市内各街頭便所には糞尿の汲取の度數を増し且つ防臭劑を撒布する等清潔の保持を勵行せり

▲傷病者救護所の設置

警視廳に於て十箇所東京市に於て四箇所日本赤十字社東京支部に於て九箇所合計二十三箇所を馬場先門より青山式場に到る御道筋並に練兵場内式場に適宜配置し傷病者に對する應急處置に任じ萬一多數の傷害者ありたる場合又は病症者ありたる場合は最寄の病院又は特定の民家に輸送する等一切の準備整頓しありたり

○乃木大將夫人逝く

大正元年九月十三日先帝陛下の靈轜御發引と同時に名將乃木大將殉死せりとの報傳はり、内外震駭す然るに大將夫人も亦之に殉したるは、更に激烈に世人を感動せしめ、その悲壯なる最後は、殆ど哀悼の辭なからしむ、世評は知らず、辭世あり左に錄して記念とす。

うつし世を神さりましゝ大君の
みあとしたひて我はゆくなり

臣　希典　上

出でましてかへります日のなしときく
けふの御幸に逢ふぞかなしき

希典妻　靜子　上

廣　告

○御名代宮御西下

皇太后陛下御名代東伏見宮妃周子殿下（本會總裁）には、皇后陛下御名代閑院宮妃智惠子殿下と共に、十二日午前一時三十分新橋發特別急行列車に御同乘桃山御斂葬御參列の爲め御西下あらせらるゝにつき本會役員は新橋驛プラットホームに於て御見送り申上たるが、殿下には親しく御會釋を賜はり、定刻に御出發あらせられたり、因に當日御見送申上げたる役員姓名は左の如し。

會長　鍋島侯爵夫人　　副會長　澁尾男爵夫人

鳩山　春子　羽田三緒子　岡田　德子　高木　錸子
山本多穗子　三浦　敎子　石川　貞子　濱田　捨子
長谷川仲子　小川　孝子　丹波　貞子　田村きよ子
小濱　芳子　山口　貞子　阿部　篤子　岸　澄子
三宅　藤子　宮本　樂子　守屋千代子（以上いろは順）

○御靈柩奉送

去る十三日本會は特に青山大葬場に於て　明治天皇御靈柩を奉送し御葬列を拜觀することを差許されたるも突然のことゝて會員諸姉に通知するの遑なく、止むを得ず代表者三名葬場に參向の上、謹みて拜送し、哀慕の涙を濺ぎつゝも、神々しき御盛儀を拜觀し聖德の深厚を記念し奉れり、委細の報告は筆紙の及ぶ所にあらず一般の新聞紙上の記事に讓る。

○御名代宮御歸京

桃山に成らせられたる　御名代閑院宮殿下、伏見大喪使宮殿下を始め、東伏見宮竝に同妃殿下にも去る十八日午前六時新橋御着御歸還あらせられ、本會役員は十二日に奉送申し上げたるところに於て御迎申上げたり、各宮殿下には御休の御暇もなく連日諸般の御大喪儀に盡させ玉しにも拘らせられず些も御疲倦の御模樣なく、殊に本會總裁宮妃殿下には御健康の程も如何あらせられむかと私に御案じ申上げたるに、御氣色いと麗しく拜せられしこそ會員一同の悦び參らす所なれ、因に濱尾副會長は停車場より直ちに宮邸に伺候、會を代表して御機嫌を奉伺されたる筈なり。當日御出迎申上げたる役員は左の如くなりき。

鍋島　會長　濱尾副會長　鳩山　春子　羽田三緒子
岡田　德子　高木　鎌子　山本多穗子　川村きよ子
中濱　芳子　宮本　樂子　守屋千代子

○本會入會者

○北原壽子紹介
●赤坂區青山北六ノ五五　通常會員　三好恒子

○長門正清氏紹介
●中華民國漢口日本租界　通常會員　賀妻八重子

○新潟支會入會者

○岡やす子紹介　通常會員　渡邊なほ子

○山形支會入會者

○三川ユラ子紹介　通常會員　相澤きく子
通常會員　上田しか子

○轉居

●西大久保一四二　吉原よれ子
●芝區高輪南町四三　渡邊はろ子
●赤坂區青山原宿一四三　塙とせ子
●陸前國佐沼町給主町四〇九　佐藤貞子
●麴町區飯田町二ノ五九　桑原春子
●赤坂區新坂町六六　川村谷子
●横須賀市港町三八吉田方　松本清美子
●麴町區飯田町五ノ五　大關ちか子

前髪心の覇王 美人印ヘーヤロール

弊店製造の特許ヘーヤロールは原料を遠く濠洲に仰ぎ新歸朝者美容術界の明星たる岡崎エン子女史が母國への土産として持ち來りしものに大改良を加へ衛生と經濟とを兼備したる逸品なる事貴婦人界既に定評あり

ヘーヤロール前髪心壹個の目方

壹尺中	貳匁四分
壹尺貳寸大	三匁四分
壹尺五寸極大	五匁五分



私立大日本婦人衛生會役員氏名

會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 男爵夫人 濱尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
同 岡田徳子
同 山本多穂子
同 松平芳子
同 羽田三緒子
同 高木鉄子
同 三浦敬子

評議員 石川貞子
同 濱田捨子
同 服部繁子
同 西舛子
同 緒方悦子
同 小川孝子
同 片山龜子
同 丹波貞子
同 田村きよ子
同 男爵夫人 南部限子
同 山口貞子
同 古市幸子
同 岸澄子
同 三宅藤子
同 宮下咲子
同 岩下ゆか子
同 長谷川仲子
同 仁禮壽賀子
同 土肥多越子
同 岡山とし子
同 男爵夫人 加藤鈴子
同 吉武輝枝子
同 高橋孝子
同 鶴原誠子
同 中濱芳子
同 子爵夫人 松井正子
同 伯爵夫人 阿部篤子
同 菊池米子
同 宮本樂子
同 守屋千代子

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金弐拾錢 郵税壹錢
三冊（三ヶ月分） 前金郵税共 金四拾五錢
十二冊（一ヶ年分） 前金郵税共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金弐圓五拾錢
○特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行弐拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ弐拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

大正元年九月十七日印刷
大正元年九月二十日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區駒込追分町二十九番地 莊司秋次郎
印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 今井甚太郎
印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鈴屋町 良明堂
同市本郷區本富士町 明文館
同市同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入 若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本郷區本富士町 盛春堂
名古屋市本町三丁目 丸善書店